とある性転の想像生成

K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある性転の想像生成

【Ｎコード】

Ｎ０５６４Ｎ

【作者名】

Ｋ

【あらすじ】

これは、とある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲の二次創作です。オリ主、チート、性転換など含まれますのでそれを踏まえた上で読んでください。

転生

オレ、柏崎（かしわざき）　零（れい）は今真っ白い空間？にいる。
空間というか、果てしなく真っ白が続いていて広さが半端ない。

そして目の前には土下座の体勢の子供がいる。
身長は多分１５０もないほど小さく、髪は緑。
どこの外人だ？もしかして迷子？

あ、オレが迷子か。

まあ、そんなことはどうでもいいとして、

どこなんだ？ここ。オレは事故で死んだんじゃなかったのか？
オレは、今日買い物をして家に帰っている途中、車に轢かれて死んだ。はず。

この明らかに地球じゃねえ場所は天国とかか？

てゆうか誰だよこの土下座したままのガキ？
何か説明とかねえのかよ。

オレがちょっとイラついてると子供がやっと口を開いた。

「すいませんでしたー！！！」

「えーっと、はい？」

突然謝りだした。
いや、謝りたいのは土下座をしてる時点でわかるから。
説明しろや、説明。

「あっ！！そうでしたね。説明しなきゃ。」

そして体勢を戻し、話し始めた。
こいつ、さりげなく人の考えてること読みやがった。うぜぇ。
説明によると、どうやらこの子供は神の見習いで、オレが死んだのはこいつのミスだったらしい。
で、そのかわりに、好きな世界に転生してくれるらしい。
まさにテンプレ。

「事情はわかった。だが、転生するだけか？もちろん違うよなぁ？」

俺が怒りながら言う。少々大人げないが俺は全く気にしない。
多分オレの顔はキレーに歪んでいるだろう。

「ひい！も、もちろん何か希望があれば叶えますよ。」

涙目になりながら答える。
どうでもいいけど、こんなんで涙目？神の見習いって言っても子供なのか。

しかし、それでもオレはやめない！

「まあそうだよな。人を勝手に殺しておいて転生するだけじゃダメだよな。」

「うっ。はい。」

小さい神はうつむいてしまった。
ちょっとだけ罪悪感。あくまで、ちょっと。

「転生する世界っていうのは、漫画とか、小説、アニメでも大丈夫なのか？」

「はい。それらも一つの世界ですから。」

ふむ、どうしようか。
テンプレだと『ネギま』とかか？
でもオレ、ネギのこと好きじゃないし、そういうのはＳＳとかで見飽きてるしなぁ。

「それで、どこにしますか？」

俺は少し考えて、

「じゃあ転生する世界は『とある魔術の禁書目録』で、超能力として『想像した全てを生成し操ることのできる能力』をくれ。後、原作が始まる直前に上条当麻の学校に転入生として転生させてくれ。」

世界を『とある魔術の禁書目録』にしたのはもちろん好きだったからだ。
他にも、学園都市に言ってみたかったってのもあるんだけどな。

能力は『無限の剣製』とかもいいが、オレはそこまで衛宮士郎に憧れたりしてない。
もっと戦闘以外にも使えるやつがいいし。そもそも使えるだけの筋

力がない。

「わかりました。ではいきますよ。」

周りが光に包まれ、そのまま意識を失った。

性転換

気がつくと見知らぬ部屋の中にいた。
あ、これ見覚えあるわ。
当麻の寮と同じじゃね？

どうやら成功したんだな、と思って部屋を色々見た。

？

机の上に手紙が置いてある。

『柏崎　零さんへ

どうも。神の見習いです。
あなたが今いるのは上条　当麻の学生寮です。
ちなみに隣は上条　当麻です。
それと、とても言いにくいことなんですが転生に失敗してしまいました。
そのせいであなたに何か影響があるかもしれません。
しかし何かあったとしても、あなたのいるその世界は僕の管轄外なので直すことはできません。
なので諦めてください。なくともあなたが希望したことは確実にできたので安心してください。
これから第二の人生頑張ってください。

『

「影響？」

？なんか、俺の声が前より少し高い気がする。
オレはこんな高くなかったはずだが。

それに、体も軽い気がする。
他にも、何か違和感がある。

下を見てみると、服の胸のあたりがふくらんでいた。

「は！？」

突然の出来事に混乱する。

これは、女性にしかないものでは？

「も、もしかして」

おそるおそる股間に手を当てるが、ない。

何がとは言わなくてもわかるだろう。あれだ。

「う、嘘だろ？」

現実逃避してみるがその声も高い。

「影響ってこれか！？なんでよりにもよってこれ！？」

「もっと他にあんだろうがぁ！！あのくそ野郎ぉ！！」

どうしよう。どうしよう。本当にどうしよう！

「と、とりあえず落ち着こう！」

深呼吸を繰り返す。

「ふう。まずは状況確認だ。」

他に何か変わったことはないかどうか鏡で確認することにした。

鏡を見てみると、そこにはショートヘアの黒髪美女がいた。

・・・正直いって、かなりのタイプだ。

「これ、俺？」

驚いて見ると鏡に写る美女も驚いてこちらをみる。

やっぱり俺みたいだ。

もう１度じっくりと眺める。

整った顔立ちで、黒髪のショートヘア。髪はサラサラとしている。身長は前とあまり変わらず、１７０ｃｍくらい。ちょっと小さくなったかも。

スレンダーな体型で、胸はＣくらいはあるだろう。少なくとも小さいわけではない。

おそらくかなりモテるだろう。

（さっきの手紙じゃあの神には直せないと書いてあった。この学園都市に性転換できるようなものはあんのか？）

答えはわからない。

でも、なんとかしないと。

「考えたって仕方がねえ。とりあえず胸当てでも買ってくるか。」

俺は女として生きていくつもりは全くない。

体は美女でも心は男だ！

設定

名前　柏崎（かしわざき）　零（れい）

性別　女

年齢　１５

身長　１６８ｃｍ

体重　５１ｋｇ

中性的な整った顔立ちをしている。
サラサラした黒髪で髪型は肩にぎりぎり届かないくらいのショートヘア。
女性にしては高めの身長でスレンダーな体型。
胸はそこそこある。
胸当てをしていても女性に間違えられたりする。というか女にしか見えない。
肌が白い。一方通行並。

能力（現時点）　想像生成（マティリアリゼイシャン）　レベル５　第２位　原石（という扱い）

『生物以外の想像した全てを生成でき、生成したものを操作できる』能力。
頭で具体的に作るものを想像しなければ生成ができない。
難易度的には白井黒子の空間転移と同じかそれ以上で、痛みや動揺などで集中力が乱れるとすぐに使用不能となる。
作ったものは、現実（とあるの世界）に実在、もしくは実在しても

おかしくないものの場合のみ幻想殺しで破壊されない。
垣根帝督の未元物質も使うことができるが未元物質の能力は本質ではないので垣根帝督の方が上だと思われる。
他にも、炎や電気、水など多重能力者級に応用が利くが、生成したものしか操作できない。
魔術も生成でき、頭の中で想像するだけなので道具などは必要ない。
ただし、魔術はとあるの世界に実在しているが破壊される。
レベル5となっているが、これは身体検査のときの能力での判定なので、確かではない。
アニメ、漫画の技、魔術などを使えることを入れるとレベル5でも一方通行以外相手にもならない。
ただし、どれも演算処理の負荷がかなり大きいので戦闘で連続して使用できない。

神の手違いで死んでしまい、チート能力をもらってとある魔術の禁書目録に転生する。
しかし転生した時に女になったしまった不幸な元男子高校生。
精神は男だが身体が女のため精神が無意識の内に身体に合わせようとしてどんどん女に近づいていく。
原作はあまり変えるつもりはなく、気に入らない事は直すつもりでいる。
とあるの世界では両親は死んだことになっている。

超電磁砲

オレは胸当てとその他生活に必要なものを買って寮に帰っている。
胸当てはもちろんつけている。
最初はつけるのに苦労したが自分一人でつけられるようになった。
明日から学校が始まる。
あ、俺は転入生だから先に身体検査か。
まあどうせレベル5だろうけど。序列何位になるかな？
不安はあるものの、新しい生活に夢を膨らませていた。

そんな中、突然目の前の銀行が爆発した。
「ほら！早くにげるぞ！」
何か見覚えあるなと思っていたところに白井黒子が現れた。
「風紀委員（ジャッジメント）ですの！」
あれ？これってなんか見覚えあるな・・・。
そう考えている内に黒子が銀行強盗の一人の攻撃を受け流し、そのまま倒した。

おー、見事な足払い。
やっぱそうだ。どっかで見覚えあると思ったら超電磁砲（レールガン）第1話じゃねえか。
「なかなかやるじゃねえか。だが。」
銀行強盗の一人の手から炎が上がった。
確か、発火能力の強能力（レベル3）だっけ。
「発火能力者。」
それを見て黒子があきれるようにつぶやいた。
「戦う前から手の内を見せてどうするんですの？ぎりぎりまでとっておくのがやりかたでしょうに。」
全くもって正論だ。
どうせ、それで相手の戦意を喪失させようと思っていたんだろうけど、相手が悪い。
黒子は空間移動のテレポーターだし、風紀委員（ジャッジメント）として訓練も積んでいる。
「てめえ！これが見えてんのか！？強能力だぞ！もっとビビったりとか警戒とかしろよ！」
「まあ。そこそこの能力ですわね。大方・・壁にぶつかって、自分はこれが限界だと思ってグレたくちなのでは？」
図星だったためか、男がうろたえて黒子に攻撃する。

何か・・・見苦しい。

しかし黒子はその男の頭上にテレポートして男を地面に倒す。

そして、足についている鉄矢を男の服にテレポートし動けなくさせる。

他の銀行強盗犯はそれを見て、勝てないと思ったのか逃げ出す。

そしてその一人はオレの方に向かってきた。

それだけではなく、

「邪魔だ！」

そう言って、腕を振ってきた。

オレはかわしたが、持っていた食料品が散乱する。

「・・・・」

男は構わず車で逃げ出す。

「・・ぶっ殺す。」

オレは能力を使ってロケットランチャーを生成する。

女の体しかも全くの素人が、撃った時の衝撃に耐えられるわけないから、『反動がない』ロケットランチャーだ。
車に標準を合わせ、ぶっ放す。
『反動がない』ほかに『必ず当たる』という風に『想像』もやっておいた。

「死にさらせ！！！」

爆音と共に弾が発射される。
弾が車に向かい命中し、車が宙を舞う。
あと、『非殺傷』でもあるので絶対に死んだりしない。

「ざまあみろ。」

食い物を粗末にする奴には万死に値する。

「ッ！」

頭が痛え。
やっぱり、実在するものを元にしていても少し違うように想像したら演算が大きくなっちまう。
連続で使わないほうが良さそうだ。

気が済んだのでまた買いにいくしかねえかと思っていたら、誰かに話しかけられた。

「ちょっとあんた！私と勝負しなさい！」

学園都市第3位超電磁砲(レールガン)こと御坂美琴(ツンデレ)だった。

やっぱり、戦闘狂なのか。

戦うなんて面倒だったので、オレは逃げることにした。

「ちょっと！待ちなさい！」

待てと言われて待つバカはいない。

構わず逃げ続ける。

「なんでオレがあんたと戦わなきゃいけないんだよ！」

「アンタのさっき使っていた能力と私のどっちが強いか調べたいからよ！っていうかアンタ男！？」

胸当てしてんのに・・・。

それでも女に見えるのか・・・。

「当たり前だ！！オレ（の心）は男だ！！」

「まあどっちでもいいわ！諦めて勝負しなさい！」

「誰が勝負するかぁああ！！！」

そのまま1時間追いかけられた。

今思ったら、別に胸当ても、飯も能力で作れば良かったんじゃあ・・・。

転入

美琴をようやくふりきったオレはへろへろになりながら寮に帰ってきた。

そして、隣の上条当麻に挨拶をしにいった。

疲れているとはいえ挨拶しないと失礼だしな。

明日からクラスメートになるんだし。

インターホンを押してすぐ、ドアが開かれた。

「はーい。どちらさまですか？」

「オレは隣に住むことになった柏崎　零。明日から同じ学校に通うことになる。一応、（心は）男だ。これからよろしくな。」

「お、おう。俺は上条当麻。よろしくな零。」

ドギマギしながらも手を出し握手をする。

やべぇ。本物だ・・・・。目の前に本物の上条当麻（ツンツン）がいる・・・・。

「それで当麻。オレここに来たばっかで学校の場所知らねえから、明日一緒に行っても良いか？」

「おう。それくらいなら全然いいぞ。」

優しいねー。やっぱ、無償で人助けするひとだけあって。

「ありがとな。当麻。んじゃあ、また明日。」

オレが笑って言うと、当麻が微妙に顔を赤くした。

オレ、男って言ったよな・・・。

・・・ま、まあ。多分風邪だろう！

オレが笑ったからじゃない、はず。

次の日、オレは当麻の部屋に行った。

インターホンを押す。

中で物音がした。多分まだ寝ていたんだろう。

数分たって当麻がでてきた。

「悪い！零！寝ていた！」

案の定寝ていたらしい。

「いいって。ほら行くぞ？まだ全然間に合うし。」

オレたちは色々話しながら学校に行った。

当麻が俺の能力を聞いてきたので、目の前で銃を作った。
ひどく驚いたが、詳しく説明せず原石だと言っておいた。

その後、美琴について愚痴をこぼしあった。
やっぱり当麻はいつも勝負を挑まれて大変みたいだ。

学校についてからは、オレは職員室に行かなければいけないので途中で分かれた。

職員室には、小萌先生がいた。

小説とか漫画で見てた時はただ小さいだけだろうと思ってたけど、リアルに見ると全く違う。

これは本当に小学生にしか見えん！

中々失礼なことを思いながら、色々説明を聞いた。
今日は身体検査で、オレだけは常盤台中学ですらしい。

まずは教室に行ってオレを紹介するようだ。
女とばれないようにしなきゃな。

当麻視点

零と分かれた後、俺は土御門と青髪ピアスと話していた。

「そうそうかみやん、知ってたにゃー？今日転校生が来るらしいにゃー。」

「女か？女と言ってくれ！」

青髪ピアスがすがるように土御門に言うが、希望を断ち切ってやろう。

「残念だが、男だぞ。」

「うそやーん！」

「なんでかみやんが知ってるんにゃー？」

「転校生、俺の部屋の隣。っていうか、男か女かはかなり微妙だぞ。」

「？」

どういうことだにゃー？、と青髪ピアスが言おうとしたところで小萌先生が入ってきた。

「はいはーい。静かにしてください。今日は身体検査ですが、その前に転校生が来てます。」

教室が騒がしくなる。

「男！？女！？」

青髪ピアスがまだ信じられないのか言っている。

現実は厳しいぞ、青髪ピアス。

「男の子ですよ。」

今度こそ青髪ピアスが撃沈する。

「そ、そんな・・・」

「では入ってきてくださーい。」

そしてドアが開かれた。

「ども。柏崎　零だ。よろしく。」

・・・・・。

零が言った瞬間、教室の騒ぎが止まった。

「・・・・・男？あれで？」

青髪ピアスが最もな疑問を口にしている。

まあ、無理もないだろう。俺も最初見た時は普通に女だと思っていたしな。

未だに男だと言うのが信じられない。

「じゃあ、あそこの席です。」

先生が俺の隣の席を指差して言った。

「わかりました。」

零が俺の隣の席に座る。

「またよろしくな。当麻。」

「ああ。」

「オマエ、ホンマに男なん？」

気持ちはわかるが、本人に聞かなければ信じられないのか。青髪ピアスよ・・。

「もちろん。制服みりゃあ分かるだろ？」

とどめをさされ、青髪ピアスは倒れた。

あ、口から魂が抜けかけている。

どこまでショックなんだ・・・。

「諦めろ。青髪ピアスこれが現実だ。」

「男を綺麗と思ってしまった俺は・・・。」

それについては同感だ。青髪ピアス・・・。

「まあ、これからよろしくな！」

満面の笑みで零がそう言った。

それにより周りに居た男子と一部の女子が顔を真っ赤にした。

また男を綺麗だと思ってしまった自分が信じられなくなった。

身体検査

ＨＲも終わり身体検査をすることになった。
やってみたら、レベルが強すぎて常盤台中学ですることになった。
場所を聞いて行った。

常盤台に着くと、美琴とその隣に黒子がいた。
見つからないよう隠れていったが、見つかってしまった。

「あ！アンタ！！よくもこの前は逃げやがったわね！！」

「はァ。」

「ちょっと、なにため息ついてんのよ！」

美琴が言ってくるが、結構うるさくて相手にするのが疲れるのだ。
だから見つかりたくないんだよなと思っていると、黒子が話しかけてきた。

「どうも、白井黒子ですの。私が今回貴方を案内しますわ。」

どうやら、黒子がオレを案内するらしい。

「先日の件ですが。」

黒子がちょっと真剣な表情で話してきた。

「ん？何？」

「貴方は一般人でありますの。ですから、ああゆうことについてはちゃんと私たちに任せて欲しいですの。」

ああ、あれか。
あの時はキレてたからなぁ。

まあ、黒子の言うことも正論だからとりあえず謝っておこう。

「ん、悪かった。あの時は買ったものが全部台無しになってキレてたんだ。」

オレがそういうと、黒子はまた前を向いて歩き始めた。

そんな最中、周りの人たちがひそひそと話していた。
何だ？オレになんかあるのか？

「な、なあ。何でオレこんなに見られてんだ？」

「やはり貴方はその顔でも殿方でありますし、ここは女子校ですので目立つのでしょう。」

なるほど。そりゃそうか。

「しかし、貴方本当に殿方でありますの？」

「美琴（ビリビリ）から聞いていないのか？オレはこんな顔でも男だ。」

隣で美琴がビリビリゆうな！と言っているが気にしない。

「それは貴方が言っているだけでありますでしょう？」

「ん、まあそうだけど・・・。」

黒子はオレの体をじっと見て、

「それに、全体的に細すぎじゃありませんこと？胸なんて胸当てをすれば十分隠せますわよ？」

「ギクッ！」

「あー。確かにそうね。」

オレは内心バレないか、かなり焦っている。

え？まさかの二日目でバレるみたいな？

「まあいいですわ。着いたことですし、このことについてはまた今度にしますわ。」

バカ広いグラウンドに着いた。とりあえずばれなくて良かった。

周りは他校の人が珍しいのかギャラリーが沢山いた。

やべぇ、緊張する。

レベルの基準はテレポート系のを参考にするようだ。

普通はプールで計るんだけどオレのは破壊するとかってそんなのに

向いていないからだとか。

ていうか、まだ一回しか使ってない能力がここまでばれてるとかってどういうことさ。

怖えな、アレイスター。

ちょっと考えている内に開始された。

「んー・・・」

何を生成しようか。

なるべく大きいほうが良いだろうな。

適当に戦車でいっか。

オレは戦車を生成した。

ズシンと音を立てて戦車が測定器の上に乗る。

まわりはいきなり戦車が出てきて驚いたのか騒がしくなっている。

『時間・・０．０２秒
重量・・６１ｔ
レベル・・・５　　』

おおーと周りがさらに騒がしくなった。

もちろん美琴と黒子も例外ではなかった。

「レベル5！？」

「驚きましたわ。」

オレは最初から知っていたので驚かなかった。
終わると、常盤台の人たちに囲まれて身動きが取れなくなった。

邪魔くせぇ。

正直なところ、別にレベルはどうでもいいんだよね。
奨学金とかも、金自体生成できるし。

そんなことを言うと他に人になんて言われるかわからんので黙っていたが。

「アンタ！勝負しなさい！」

また美琴が勝負を仕掛けてきた。

今日はそれほど忙しいわけではないので、受けることにした。

「まあ良いぞ。」

美琴は目を輝かせ、

「え？本当？じゃあ、移動するわよ。」

原作で当麻と美琴が戦っていた川原かな？
そういえばこれってオレに利点なくね？
なにか条件でもつけるか。

「じゃあさ、負けた方は何でも言うことを聞くっていうのはどう？」

「は！？」

「何？超電磁砲（レールガン）こと御坂美琴様がそんなことを恐れると？」

「！いーわよ。受けて立とうじゃない。」

こんな安い挑発に乗るなんて・・・。

美琴の性格って不憫だなと思いつつ移動した。
素直になれば当麻なんてイチコロだろうに。

身体検査　（後書き）

時系列がおかしくなるかもしれません。

決闘

河原に着いた。
やっぱり、原作で美琴と当麻が戦った場所だった。
それにしても、なかなか広くていいな。

「じゃあ行くわよ！」

掛け声と共に美琴から電撃が発される。
明らかに人に向けてやる電撃ではない気がするんですが。
しかもオレが返事する前に攻撃ってどういうこと？

オレは自分の周りを取り囲むように『純水』を生成。

『純水』は電気を通さない。
それはレベル５の電撃であろうとも。
美琴の電撃が消える。

「なっ！？」

美琴が驚いている間にオレは掌に炎を生成し投げる。

「はあ！？何なのよ！？アンタの能力！戦車だしたり、水出したり炎出したり！」

そう言いながら美琴がかわす。
美琴の反応は当たり前だろうな。武器作る能力だと思ったら水。しかもその直後に炎。

まあ、混乱させるためにやったわけだけども。
おもしろいし。
「言っとくが、多重能力者じゃないぞ。」
更に、オレは炎の玉を生成し投げ続ける。
美琴はかわしながらも電撃を放ってくるが、オレは常に周りを純水で囲んでいるため無効化される。
「ちょ、アンタ！それ、ずるくない！？」
「いや、だって怪我したくないし。」
美琴が諦めて距離をとったため、オレも攻撃をやめる。
「アンタの能力ホント何なの！？」
「まあ、終わったら教えてやるよ。」
「そう。そろそろこっちも本気でいかせてもらうわよ。」
美琴がそう言うと砂鉄が集まり始める。
磁力操作を利用した砂鉄剣？だ。
オレは純水を消して『王水』を生成する。
「？何よそれ。」

美琴が空中に浮いている『王水』を見て言う。

「王水。」

「はあ！？何物騒なもん出してんのよ！」

そういいながらも美琴も物騒なもん（砂鉄剣）で攻撃してくる。
おいおい、明らかにヤバイだろ。
振動してあるから切れ味も上がっていて当たったら怪我ですむのか？
今思ったら原作では当麻には『幻想殺し（イマジンブレイカー）』
には普通の砂鉄に戻されてわからないんだよな。

「オマエも似たようなもんだろ？」

『王水』で砂鉄剣を溶かす。
ちゃんと美琴には当たらないよう操っている。

「アンタ！なめてんの！？」

オレがわざと攻撃が当たらないようにしていることに気がついたよ
うで美琴の額に青筋が。
おいおい、女子がそんなんでいいのかよ。
そんなことを気にしてるようじゃ戦いなんてしないか。

「いや、オマエも溶けたくはねえだろ？」

「まあ、そうだけど・・・」

「それよりも、その砂鉄の剣も効かないぞ。どうする？」
自分の人に対する攻撃がきれた後はアレしかないだろ。
「・・仕方ないわね。」

美琴はポケットからコインを取り出す。
学園都市第３位の能力名でもある超電磁砲だ。
残されてるのはそれしかないっしょ。
「まあ、アンタなら大丈夫でしょ。」
どこから来てんすか。その自信。
オレの疑問など露知らず、美琴が手を突き出し構える。

これやったら驚くかな？
オレも手にコインを生成。

更に電撃を生成し美琴と同じように構える。
オレと美琴の手先では電気がバチバチと音を立てている。

「まさか・・・」

美琴はオレの構えを見てかなり動揺している。
オレは美琴の疑問に笑顔で答えてやった。
かなり見下した笑顔だけど。

『ブチィ！』

あ、完璧にキレた。

「舐めるんじゃ、ないわよ！！」

「からかっただけなのに・・・。」

オレと美琴の手から音速の3倍もの速度の電磁砲（レールガン）が発射される。

激しい轟音と風。

そして2つの超電磁砲が衝突する。
少しぶつかった後、2つの電磁砲（レールガン）は相殺し、消えた。

「なっ！？」

オレは美琴が驚いている間に銃と弾を生成。
弾については実弾じゃ危ないのでゴム弾。
それでも、当たり所が悪ければ死ぬこともあるがまあ実弾よりはマシだろう。

オレは弾を相天し隙だらけだった美琴に撃つ。
自分の最強の技が防がれて驚いて隙だらけだった美琴に難なくあたり、そのまま気絶した。

「勝った・・のか？」

実感があんまりない。
まあ、最後かなりあっさり終わったからな。

「とりあえず美琴が起きるまで待つか」

それにしても、電磁砲（レールガン）怖かった。
もう戦いたくないけど、多分挑まれるんだろうな・・。

数分後、美琴が起きた。
目をぱちくりとしていて今どんな状況か確かめているようだ。

「よう。気分はどーよ？」

美琴はオレの顔を見て思い出したのか何か諦めた表情をする。

「そっか。私負けたのか・・・」

「そう。負けた。」

そういうと美琴は落ち込んでしまった。
まあ、その気持ちはわかるけどな。

だって滅茶苦茶努力して自力でレベル5になって勝ちまくってたのに当麻とかオレには負けるんだからな。

「ま、まあ気にすることはねえって。負けちゃったけど別に同じレベル5なんだし。悔しかったらまた挑めば良いだろ？」

そう言ったら美琴が好戦的な目に変わった。

あれ、ミスった？

「！ホント！？んじゃあもう1か――」

「ストップ。今日はこれで終わりだ。」

あからさまに落ち込んだ。

2回連続は流石にきつい。

オレの能力はほとんどあらゆるものを生成できるけど、その分スタミナ消費が激しい。

同じ威力の電磁砲（レールガン）でもオレと美琴ではスタミナ消費が全く違う。

美琴から見たら余裕そうに見えるだろうけど、多分電磁砲（レールガン）なんぞギリギリ後2，3発撃てるかてトコだ。

美琴も電撃、砂鉄剣、電磁砲（レールガン）と結構スタミナが消えただろうし。

だから、今日はもう終わり。

でも、まだ残っていることがある

「ねえ、覚えてる？」

「？」

「負けた方は何でも言うことをきく。」

オレはニターという感じで笑いながら言ってみた。
そうしたら、美琴がビクッと跳ね上がった。

「何してもらおうかな？」

美琴がものすごく緊張している。
冷や汗だくだく。

「んじゃあ・・・」

美琴がつばを飲む。

「電話番号とメアド教えて？」

「へ？」

「いやだから、電話番号とメアド。」

「普通にいいけど・・・何で？」

何でって、

「いやだって、これからいろいろ決闘とかするんだろうし、それなら連絡とれるようにした方が良いだろ？」

「まあ・・そうね・・・。」

「というかぶっちゃけ、まだここに来たばっかで誰も知らないからなんだよね。」

「そんなんで良いの？」

「うん。」

「・・何か拍子抜けしたわ。もっとすごいの来ると思っていたから。」

「オレがそんな鬼畜人間だと？まあいいや。ほら携帯よこせ。」

とりあえず電話番号とメールアドレスを交換し、その後はオレの能力について話したりした。

説明したらチートとか言ってきた。うん。それについては否定しな

い。

時間も結構たったので帰ることにした。

「じゃーな！美琴！当麻は鈍いからな！頑張れよ！」

オレがからかってやったら顔を赤くした。

「ななな、なに言ってんのよ！／／／」

決闘（後書き）

当麻と美琴を結ばせるつもりです。

あくまで、つもりです。

紹介

美琴との決闘から2日後、オレはセブンスミストに買い物に行こうとしている。

二日間何をしてたかと言うと、朝、学校へ行き帰ってからは部屋にずっと篭って色々生成しまくり。
そのおかげで自分の能力とか結構把握できてきた。

で、何で出かけてるかというと、篭りっぱなしであまりゆっくり買い物をしていなくて、いい加減服とか買わなきゃな、と思ったからだ。
想像して作ろうかと思ったけど、日常生活であまり能力に頼らない方がいいと思ったし、学園都市の店とかも知っとこうと思ったしね。

それに、虚空爆破事件も起こるからね。
まあ、主な理由はそれなんだけどさ。

移動してる途中、女子中学生3人と出会った。
美琴と飾利と涙子の三人だ。
原作通りに3人もセブンスミストに行くんだろう。

「よう。美琴。」

「あ、アンタね。」

「？誰ですか？御坂さん。」

飾利が美琴に尋ねる。

美琴は最初嫌な感じの顔をしたがしぶしぶといった感じで言う。
「あー。こいつは新しいレベル5で私に勝った奴よ。」
「！じゃあ、噂の学園都市第2位ってこの人ですか！？」
飾利がキラキラとした目で聞いてきた。
あー、オレ2位なんだ。まあ1位は格が違うしな。
篭りっぱなしでテレビとか見てなかったから気づかなかった。
と思っていたら2人が自己紹介してきた。
「私は風紀委員（ジャッジメント）の初春飾利です！よろしくお願いします！」
レベル5に会えたのがうれしいのかテンションが上がっている飾利。
一日でレベル5に2回会うなんてそうそうないだろう。
「どうもー。初春の親友やってます、佐天涙子でーす。」
原作通りの涙子。
多分先に美琴に会った事もあってあまり驚いてないんだろう。
「おう。オレは柏崎零だ。よろしくな。飾利、涙子。」
「「（オレ？）」」
「アンタはこれからどこに行くの？」
2人の紹介も終わって美琴が聞いてきた。

「オレはセブンスミストに行こうと思ってる。まだこっちに来たばかりで服が少ないんだ。」

「じゃあ、アンタも一緒に行かない？私たちもセブンスミストに行くし。」

「いいぞ。」

オレたちは一緒に行くことにした。

セブンスミストに行ってる最中の3人の会話。

飾利「すいません。御坂さん。零さんって男の人ですか？」

美琴「本人が言うにはそうなんだけどね・・・。」

涙子「あの顔で男っていうのは、信じられませんよ。」

美琴＆飾利「「確かに。」」

涙子「御坂さんもそう思いますよね？」

飾利「肌も白くて綺麗だし。」

美琴＆涙子「「ハア。」」

飾利「声も男の割にはちょっと高いですし。」

美琴&涙子「「怪しい。」」

美琴「そういえば・・・黒子が男かどうか聞いたときあからさまに動揺してたわね。」

飾利&涙子「「ますます怪しい。」」

美琴「じゃあ、セブンスミストに行ったら確かめない？」

飾利「どうやってです？」

美琴「水着を試着してもらう。」

涙子「そっか。そうすれば自然だし、確かめられる。」

飾利「それでいきましょう！」

美琴「ていうか、それでもし男だったら自信なくすわ。」

飾利&涙子「「そうですね・・・」」

紹介（後書き）

主人公は基本的に人を名前で呼びます。いまさらですが。

虚空爆破

セブンスミストに着いた。
先に女3人の方の買い物をすることになった。
当麻が子供の買い物に付き合うために来ていた。
当麻っていい人だよな。
美琴が当麻に喧嘩をしようとしたが止めた。
水着コーナーに行った飾利と涙子がちらちらオレを見てきた。
なんとなく背中に悪寒が走ったので、当麻と美琴がいるところに逃げた。

美琴が欲しがっていたパジャマを当麻に買わせた。
案の定、美琴は赤くなりながらもしぶしぶ受け取っていた。
当麻は何故買わせたか気づいていなかった。
とりあえず頭を殴っておいた。

買い物の最中、飾利の携帯がなった。
「はい。もしも・・・」

『初春ッ！！！今どこにいるんですのっ！！？』

「しっ・・・白井さん！？えっと現在警邏中でありまして決してサボっている訳では・・・」

サボっていたのか。やっぱり。

『例の虚空爆破事件の続報ですの！』

「えっ！？」

『衛星が重力子の爆発的加速を観測しましてよ。』

「か、観測地点は？」

美琴と涙子が頭に？マークをつけている。

『今、近くの風紀委員達を急行させていますの。』

『あなたも速やかに現場へ向かいなさい。』

「ですから、観測地点っ・・・」

『第七学区の洋服店「セブンスミスト」ですの！』

「ラッキーです。私今ちょうどそこにいますっ！！」

『何ですって！？初は・・・！！』

黒子が何か言おうとする前に飾利が美琴とオレに説明をした。
避難誘導の協力を求めてきた。
放送などを使って、数分後セブンスミストには客がいなくなった。

「ビリビリっ。あの子は？」

そんな中、当麻が

「は？まだ戻ってなかったの？」

「人が多すぎてよくわかんねーけどたぶんまだ・・・」

『初春ッ！！初春！！聞きなさい！』

「今全員避難したか確認を・・・」

『今すぐそこを離れなさい！！！』

『過去八件の事件全てで風紀委員が負傷してますのっ！！犯人の真の狙いは観測地点周辺にいる風紀委員！！！』

『今回のターゲットはあなたですのよ初春っ！！』

初春が驚いている中、当麻と一緒に来ていた子供がパタパタとぬいぐるみを持った来た。

「おねーちゃーん。」

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって。」

当麻がそれを見てホッと安心する。

「よかった無事だったみたいだな。」

そう言ってるのもつかの間、ぬいぐるみが圧縮し始める。

それを見て顔色を変えた飾利が子供を抱き抱え爆弾から離し、叫ぶ。

「逃げてください！あれが爆弾ですっ！」

美琴視点

初春さんの叫び声と同時に私は動いていた。

「（レールガンで爆弾ごと吹き飛ばす！）」

ポケットからゲームセンターのコインを取り出す――

――はずだった。

「しま・・・っ！？」

私は焦っていてコインを落としてしまった。

みるみる圧縮するぬいぐるみ。

「間に合わ――」

そして、爆音が響いた。

当麻視点

「逃げてください！あれが爆弾ですっ！」

それを聞き、俺は反射的に走り出す。

あれが超能力で作られたものなら、この幻想殺し（イマジンブレイカー）で破壊できるはずだ。

が、

「間に合わ、ない！」

前にいる風紀委員（ジャッジメント）の女の子と俺が連れてきた子供のところまでギリギリ届かない。

そして、爆音が響いた。

介旅初矢視点

爆弾を設置しておいて、僕は裏路地で爆発を見届けようとしていた。

今まで練習を重ねていたので今回は一番爆発の規模も威力も高いはずだ。

近くに居た子供に持たせてやったから馬鹿な風紀委員（ジャッジメント）の女はやられるだろう。

そう思っていると、爆音が響いた。

しかし、

「何故だ！？何故爆発していない！？」

店は全く変わっていなかった。

どうなっている！？あれなら風紀委員は爆発に巻き込まれ殺せるはずだ！

なのに何故！爆発が起きたのに店は無事なんだ！

「クソッ！！」

今回はおそらく不発に終わったのだろう。

「今度こそ無能な風紀委員（ジャッジメント）もアイツラも、みんなまとめて吹き飛ばしてやる！」

これは復讐だ！

あの時、助けにも来ずに

あと少し、あと少し！もっと数をこなして次はちゃんと――

突然、後ろから蹴られた。

「なっ・・！？」

振り返ってみるとそこに、男か女かわからないような奴がいた。
見た目は完璧に女だが、服装が男なのでどっちか判断がつかない。

「探したぜぇ。爆弾魔さんよぉ。」

！？

何故知っている！？

このままではやばい。

「な、何の事だい？　僕は偶々ここに――」

「爆発ならちゃんとしたぞ。オマエのミスじゃねえ。」

「な、なら何故店が無事なんだ！！」

反射的にそう言うとその男？が薄く笑った。

ま、ずい。今の言葉は犯人と自白したようなものだ。

やばい。やばいやばいやばい！！

「い、いや。爆音がすごかったんで・・・」

僕はそう言いながら、後ろ手に隠したバッグの中から、スプーンを取り出す。
幸い、まだコイツは気付いていなさそうだ。
そして、それを爆弾に変えようとした瞬間、

首に剣をそっとそえられた。

「ひ・・」

「死にたくなかったら動くな。」

男から発せられる殺気が尋常じゃない。

それよりも、

いつの間に剣を出した！？

恐怖と疑問により固まっていると、体に電流が流れてきた。

なすすべもなく、僕は意識を手放した。

黒子視点

どうなっておりますの？

今私はセブンスミストの虚空爆破事件が起きた場所にいますの。

ここで爆発が起きたはずですのに痕跡が全くないですわ。

確かに爆音を聞いたと証言はありますのに。

お姉様には完璧に爆発を消すなんて無理でしょう。

お姉様なら逆に大きな攻撃で破壊しようとするでしょうし。

それこそ、店内が全くの無傷というのがありえない。

となると、

「零さん、でしょうか。」

それにしても、

「どうやったら、爆発を消せますの？」

お姉様は知っているそうなので今度聞いてみることにしましょう。

ところで零さんはどこに行ったんですの？

零視点

――十数分前――

「逃げてください！あれが爆弾ですっ！」

オレはそれが聞こえる前にすでに演算をしていた。
原作で知っていたため、皆より早く動けたおかげだ。
そうでなければ皆より演算が大変なオレが間に合うはずもない。

ぬいぐるみが圧縮している。

美琴と当麻は間に合っていない。
このままじゃあ、飾利たちが爆発に巻き込まれる。

原作じゃあ、当麻が右手の幻想殺し（イマジンブレイカー）で爆発から飾利たちを防いでいたが、それじゃあ店側も被害がありそうだし、そもそも飾利が原作と違ってかなり爆弾に近い位置にいる。
なら、爆発を破壊するのでも消すのでもなく、ただ防ぐ。

「『箱』」

ぬいぐるみが中に入るように箱を生成する。
ちなみにこの箱は合金でできているため頑丈だ。
1つじゃ足りないだろうから何重にも作る。
ぬいぐるみを完全に隔離した。

そして爆音が響いた。

しかし爆発は箱によって防がれ皆無事だった。
皆は、何故爆発が起きずにいるのかわからず唖然としている。
「さてと、爆弾魔さんを捕まえに行きますか。」
そんな中、オレは裏路地に向かった。

虚空爆破（後書き）

主人公は当麻と美琴を結ばせるため色々頑張ります。

暗部

「もしもしー？土御門ー？」

「零。なんだにゃー？」

オレは会話からわかるように今、土御門に電話している。
電話番号は当麻から聞いた。

で、何故電話しているかと言うと、暗部に入るためだ。
一方通行との交流を持っておきたいし、物語上暗部にいたほうが色々都合のいいこともあるだろうし。

「オレさ。暗部に入りたいんだけども。」

「っ・・・！！」

オレが言ったことで土御門の雰囲気が電話越しでもわかるほど変わった。
いきなり電話でそんなこと言ったらまあそうなるわな。

「なんのことだにゃー？」

「とぼけたって無駄だぞ。お前が暗部だってことも魔術師だってことも知っている。」

「・・・どこまで知っている？」

無駄だと思ったのか口調が変わった土御門。
盗聴とかあるかも知れないけどいっか。
アレイスターがなんとかするだろ。

「んー、後は多角スパイだってこととか、魔法名が『背中刺す刃（Ｆａｌｌｒｅ８２５）』とかくらいかな？」

「・・・・・。」

土御門は疑っているのか、黙っている。
そして、重い口を開いた。

「・・わかった。暗部に入りたいんだったな。お前ほどの奴が入るのは大歓迎だ。」

「そう。ありがとう。」

「名前は『グループ』。仕事があれば連絡が入る。」

「それくらいなら知っている。他に何かあるか？」

「いや、ない。」

「そうか、これからよろしくな。」

オレはそういって電話を切った。
暗部入り達成。

早っ。

数十分後。

「暇だ。」

そう。暇。暇すぎる。
暗部にも入れたが、連絡が来ない。
流石に初日で仕事はないか。色々手続きとかあるのだろう。

これといってすることもないし。

「とりあえず、出かけよ。」

何かあるだろう。多分。

現在、ファミレス内。

当麻と一緒にいます。

昼飯食ってなかったから食おうと思っていたら当麻とバッタリ会いました。

そして、

どっかで見たことある常盤台の制服を着ている女の子が数人のスキルアウトに絡まれています。

「なあ、零。」

「何だ？」

「あれって助けた方が良くねえか？」

「あれ美琴だろ？別に良いんじゃね？」

どうせビリビリさせて終わるだろ。

「いや、そっちは全く心配ないんだけど、逆に周りの男の方が危ないだろう。」

「まあ、いつ美琴が切れるかわかんねえしな。」

学園都市に8人しかいないレベル5が切れたりでもしたらひとたまりもないだろう。

原作では美琴に絡んだ奴黒こげになっていたし。

助けに行った方がいいのかな？

「やっぱりいってくるよ。」

「あ！おい！当麻！」

オレの制止を振り切って当麻は美琴のところに行ってしまった。
あれは幻想御手の手がかりを手に入れようとしてわざとやってるんだけどな・・・。

知らないとはいえ、やっぱり当麻はお人好しすぎねえか？

「オレも行った方が良いか？」

やっぱり原作には関わっておこう。
行こうとしたとき、電話が鳴った。

土御門からだ。

「もしもし。」

「仕事だ。」

初日からあんのかい。

「やっぱり、にゃーにゃー言わないんだ。」

「うるさい。仕事は暗部の下部組織の殲滅。場所は送るからそれを見ろ。」

多分、腕試しってところかな。

「わかった。」

電話を切る。

オレは会計を済ませ、店を出た。
その時、当麻と不良が通り過ぎた。

心に中で当麻に謝りながら、仕事に行った。

暗部の殲滅が終わって夜、落雷が降り周辺が停電した。
美琴の雷だろう。
だということは明日はインデックスが登場するはず。
夕方にはステイルとの戦い。
それに、超電磁砲では木山春生が出てくる。
インデックスの『歩く教会』は壊さないようにしたほうが良いだろうな。
怪我させるわけにもいかないし。
よし。朝はインデックスと会って、『歩く協会』の破壊の阻止。
その後、木山春生と会い、夕方にはステイルとの交戦って感じかな。
オレは明日の出来事について考えながら寝た。

次の日。

オレは朝早く起きたので昨日全滅した食料を買いにいった。
オレの能力は生物などは作れないので、食材なども作れないものがある。
それは野菜とかだ。肉などはすでに死んでいるものなので作れたり

できるが野菜はできなかった。
ただし、加工してあるものは作れたので気にはならないが。
そういえば、オレの能力って生物以外の想像したものを作れるんだから魔術とかアニメ漫画のを作れるんだろうか？
どっちもステイルとの戦いで確かめよう。
買い物し終わって寮に戻った時、当麻の部屋から叫び声が聞こえた。

「イデデデデ！！」

オレはそれを聞き、急いで中に入る。
ちなみに鍵は掛かってたが、鍵を生成し開けた。

中では、裸のインデックスが当麻の頭にかぶりついていた。
知らない人が見たら、当麻が少女を連れてきてコスプレさせ怒られている図にしか見えない。
知っていたオレでもちょっと引くかな。
当麻が変態にしか見えないから。
どっちにしろ遅かったようだ。インデックスの『歩く協会』はすでに破壊されていた。
そんなことより、

インデックスが裸なのに何も思わないのはオレの好みじゃないからだ。そうだ、そうに決まっている。決して体が女だからとかじゃないはず！・・・だよね？

「・・・・。」

「ちょ、助けて零！」

オレが黙っていると当麻が悲痛な声で言ってくる。

我に返ったオレはどうしたかと言うと、

「失礼しました～。どうぞごゆっくり。」

自分の頭を冷やすのと、からかいのために部屋から出ることにした。

「ちょ・・。待っ・・・。誤解だ零ーー！！」

まあ、このまま放っておくわけにはいかないから当麻とインデックスを引き離した。

「大丈夫なのか？」

「なんとか。しかしあっちこっち噛み付きやがって・・・。」

当麻の頭にはキレイな歯型がついている。

よくもまあこんなキレイに残せるもんだ。なかなかすごいんだなインデックスの歯。

それに耐える当麻も中々だけど。

オレは消毒液を生成し、当麻に塗ってやった。

「染みるかもしれないが我慢しろよ。」

「あ、ああ。（やばい。零なんかいい匂いする・・。俺はおかしいのか？）」

当麻は顔を赤くしたかと思うといきなり落ち込み始めた。

あー、さっきのインデックスの裸を思い出して顔を赤くして、厄介なことになったから不幸だと思って落ち込んだのか。

そんな感じだろうと思って放っておいた。

「そこの女の子は大丈夫か？」

「・・・・・・。」

ドス黒いオーラが出しながら歩く教会を安全ピンでつなげている。

どうやら話を聞く気はないようだ。

その間に当麻がこうなった説明をしてきた。流石に誤解されたままじゃ嫌なようだ。

「俺の幻想殺し（イマジンブレイカー）で壊れたってことはあながち嘘じゃないってことか？」

「まあ、そうじゃないか？というより当麻補習じゃないのか？時間

大丈夫なのか？」

オレがそう言うと当麻はへ？とした顔になって時間を確認し、

「不幸だーーーー！！！」

叫んだ。

初めて聞けたぞ生の『不幸だ』。

ちょっと感激。

「零！オレ補習行ってくるからその子頼む！」

当麻は準備をし始め行こうとした。

が、その時、転んでしまい携帯を踏み潰した。

ボキッと共に携帯の画面にヒビが入った。もう二度と使い物にならないだろう。

「不幸だ・・・。」

「まあ、そういうな。ほら。」

オレは『当麻の携帯』を生成し当麻に渡す。

目の前にあったから生成しやすかった。

「これ。お前の携帯と全く同じものを作ってやった。全く同じだから電話番号とかもちゃんとある。」

「へ？・・・・あ、ありがとうございます！」

当麻は最初とまどったが、すぐにペコペコと頭を下げてきた。
今まで静かだったインデックスが口を開いた。
いつの間にか、安全ピンだらけの『歩く教会』を着てる。
「・・・君の右手、神様のご加護とか、運命の赤い糸とか。そういうものがあったとしたらまとめて消してしまっているんだと思うよ？」
「は？」
「だから、当麻が不幸なのはその右手のせいじゃないかってこと。」
それを聞いた当麻は天国から地獄へと落ちた。
「不幸だ・・・。」
本日三回目の『不幸だ』ありがとうございます。
一日にこんなに聞けるとは。
「インデックスはこれからどうするんだ？」
「逃げるよ。此処にいると敵が来るから。」
「敵？」
変態ロリ神父と露出狂剣士のことか。
「この服は魔力で動いているからね。それを元にサーチかけてるみ

たいなんだよ。でも大丈夫、教会まで行けば匿ってもらえるから。」

「ちょっと待てよ。それが分かってて放り出せるかよ！！」

当麻が正論を言うが、インデックスの次の言葉には詰まるんだろう。

「じゃあ、私と一緒に地獄のそこまでついてきてくれる？」

「！・・・・」

やはり答えに詰まった当麻。

それを見てインデックスが出て行こうとするが、オレが止める。

このまま行かせるにはちょっとね。

「ちょっと待て。せめて飯でも食っていけ。腹減ってるんだろう？」

「・・・ありがとう！」

「当麻は補習に行け。間に合わないぞ。」

「わかった。」

当麻はそう言って出て行った。

その後はオレの部屋で簡単な料理を作ってインデックスと食べた。

食べ終わった後、インデックスがまたありがとうと言って出て行った。

「インデックス！困ったらまた来いよ！」

最後にオレがそう言うとインデックスは笑顔になった。

『歩く教会』は破壊されたけど、原作通りに進むには壊すしかないから仕方ないか。

インデックスの怪我も仕方がないと割り切るしかない。

どっちにしろ治るんだし。

飯を食べのんびりしていると、美琴から電話が来た。

『零！今大丈夫？』

「何だ？美琴。」

『この前の虚空爆破事件の犯人が昏睡状態になったって！』

「！わかった。どこだ？」

美琴から場所を聞き、すぐ向かった。

木山春生と発覚（前書き）

今までで一番長そうです。

木山春生と発覚

「うわぁ・・。」

病院内では、黒子が美琴にキスをしようとしていた。
美琴はオレが来たことと黒子がキスしようとしていることにようやく気がついたようで顔を真っ赤にした。
気にしないでおこう。趣味は人それぞれだ。

「で、どうなってるんだ？」

黒子が説明してきた。
原作通り虚空爆破事件の犯人は体に全く異常が見られないのに昏睡状態。
しかも、最近同じケースの患者が増えているとのこと。
何故なっているか知っているけど、今言ったら不自然だから言わないでおこう。

「君たちが、担当の風紀委員（ジャッジメント）かな？」

突然聞こえた声に振り返ると歩いてくる人を見つけた。
ボサボサの茶髪のロングヘアー。目の下には隈ができていて白衣を羽織っている。
手入れすれば普通にモテそうなのに。もったいない。

「どうも。大脳生理学を研究している木山春生という者だ。」

「風紀委員（ジャッジメント）の白井黒子です。」

「御坂美琴です。」

「柏崎零だ。」

「御坂に柏崎・・・。常盤台の『超電磁砲（レールガン）』に噂の学園都市第2位の『想像生成（マティリアリゼイシャン）』か。」

やっぱり有名なのか？

黒子が今回の事件は幻想御手が関係するかどうか聞いている。
そんな中、木山先生は暑いようで手をパタパタと扇いでいる。

「暑い・・・。」

木山先生が服を脱いでいく。
おいおい、流石にそれはないんじゃないだろうか。

「何をストリップしておりますの！？」

黒子が叫んで止めるが、木山先生は気にしていなく何が悪いのか全くわかっていない。

「ここは殿方もいますのよっ！？まあ、どっちかわからないような方もいますが・・・。」

黒子と美琴が止めようとしている中、オレは驚愕していた。

何でオレは何も思わない？

いくら体が女だからといって、精神は男だ。
普通の男なら、女性の下着姿を見てせめて顔くらい赤くなるはず。
なのに、オレは何とも思わない。何で脱いでいる？くらいだ。
前のオレなら、多分顔を真っ赤にしているはずだ。

ということはオレの精神も女体化している？
前にインデックスの裸を見て何も思わなかったのも、タイプとかそんなのは関係なくそのせい？

オレが否定したくてもしきれないことに考えついて落ち込んでいると美琴が理由もわからないのに慰めてくれた。その慰めが心に刺さるよ・・・・。
美琴に感謝しつつ、それでも気が晴れることはなかった。
木山先生が暑いというので、ファミレスに行くことになった。

「さて、先ほどの話の続きだが、同程度の露出度でも、なぜ水着は

よくて下着はダメなのか。」

「「「いや、そっちでなく」」」

木山先生はあれ？とばかりに首をかしげる。

大丈夫なのかね。この人天然すぎるだろう。

何もわかっていない木山先生に黒子が幻想御手について説明する。

「なるほどね。それで幻想御手の調査を私に頼みたい、と。」

脳の研究をしている先生に頼むのは当たり前だろう。

「よろこんで協力しよう。むしろ、君たちにも協力してもらいたい。」

よくもまあ、犯人なのにこんな抜けぬけと言えるもんだ。

自分も知っているのに言わないので似たようなもんだが。

「連絡とか取りたいので連絡先教えてもらってもいいっすか？」

「ああ。大丈夫だよ。」

木山先生の電話番号を入手した。

今度からかってやろう。

「それにしても、さっきから窓に張り付いている娘がいるんだが君たちの知り合いかい？」

何やってんだ涙子・・・。

はたから見たらかなりの変人だろ。
飾利も止めろよ・・。

「学者さんなんですかー。」
涙子と飾利に合流した。
「そうですわ。幻想御手(レベルアッパー)について尋ねていたんですの。」
「お前ら、大丈夫だと思うが幻想御手(レベルアッパー)を手に入れても使うなよ?最悪昏睡状態になるだろうからな。」
これだけ危険性を指摘しておけば涙子も使ったりしないだろう。
「?どうしたんですか、佐天さん?」
ボーっとしていた涙子はいきなり飾利に話しかけられ、
「え?あ、なんでもないっ。」
アイスティーを落としてしまった。
最悪なことに、木山先生のストッキングに。
「すいません!今ふきますね!」
涙子がふこうとするが、

「ああ、かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば大丈夫――」

木山先生はストッキングを脱ごうとする。

この人に恥じらいがないのだろうか？

ないから脱ぎ女なのか。

実際に見ると漫画とは全然違うように感じる。

慌てて皆が止めに入る。

「だから！人前で脱ぐなと何回いったらわかりますの！？」

「いやしかし、私の体を見て興奮するような人はいない・・」

どうやったらそう断言できるのだろうか？

オレが言うのもなんだけど、自分の見た目についてしっかり理解した方がいいんじゃないだろうか。

「趣味嗜好は人それぞれですの！とにかく、人前で脱いだりしちゃ駄目ですの！」

黒子の必死に説得により、脱ぐことだけは阻止したようだ。

「さすがは都市伝説の１つ『脱ぎ女』だな。」

そう言ったら、木山先生がじっと見てきた。

「さっきから気になっていたんだが、君は男のような言葉遣いだが男なのか？女なのか？」

「「「「！！」」」」

他の４人もオレに注目してきた。

な、何？

オレは質問に動揺しながらも答える。

「な、何いってるんすか。男ですよ。」

平気な顔をしているが、内心は冷や汗ダラダラだ。

「そうだったのか、悪いな。疑うようなマネをして。」

「信じられません！」

「そうよ！」

飾利の反論に美琴も加わる。

「そ、そう言われたって。涙子、黒子助けてくれ。」

オレが２人に助けを求めるとその２人も、

「ふふふ、いい機会ですわ。」

「セブンスミストでは確認できませんでしたからね・・」

八方塞りだ・・・。助けがない。

逃げるか？
・・いや駄目だ黒子がいる。逃げようとしても捕まっちまう。
ちなみにオレは窓側で隣には黒子が座っている。
聞いてきた木山先生ですら唖然としている。
白状するか？・・でも、ばれて女として暮らすのも嫌だ。
マジでどうしよう？

「え、えっと・・」

「もういいですわ。自分で確かめます。」

黒子はそう言ってオレの胸の辺りに触れた。

「ないですわね。」

いきなり触ってきて驚いたが胸を触ってくるとは。
流石、お姉様至上主義者。やることが違う。
でも、さすがにこれなら信じてもらえるだろうと思って、油断した。
突如、黒子がオレの股間を触ってきたのだ。
ヤバイ――！
慌てて手を振り払うが、しっかりと触られた。
これは、ばれた。

「ない、ですわね。」
にやりと笑っている黒子が言った。
かなり黒い笑みです。

もう何言ったって男だと信じれないだろう。
いくら女か確かめるためとはいってもいきなり股間を触ってくるのはどうなのだろうか？
もう諦めてそんなことを思ったのも一瞬のこと。

満面の笑みの悪魔が４体いた。

実際には美琴と黒子と飾利と涙子なのだが、オレには悪魔にしか見えなかった。
言い方を変えるのならば、いいおもちゃを見つけた子供か？
どっちにしろ、怖い。
「もうどうやっても言い逃れはできませんよ？」
悪魔におびえながらも白状する。

「ああ！そうです！オレは女です！」
聞けて安心したのか少し落ち着いてきたようだ。
皆、ああやっぱりそうなのかって感じだ。
「それで、何で零さんは男装なんかしているんですか？」
「そうよ！そんな美人なのに・・・」
「もったいないです！」
涙子の質問に美琴、飾利と続く。
「いや、オレの体は女だが精神は男なんでな。多分。」
「「「「？」」」」
――説明中――
「つまり、此処に来たら体が女になっていたと・・・。」
いくらなんでも神の手違いでやったとは言えないので学園都市に来たら何故かなっていたことにした。
結構、いやかなり変な話だが外れてはいない。
「だから、男装なんかしていたのね。」
「そういうこと。体は女でもオレは男として生活したいの。」

「でも、そんなことって無理ですよね。」

「ぐっ！」

飾利なら慰めてくれると思ってたのに！

ズバズバ言ってきて酷い。

「アンタ、精神が男だってことは黒子と同じ・・・？」

青ざめながら美琴が聞いてきた。

「そうだと思っていたんだがな・・・・。さっき、木山先生の下着姿見ても何も思わなかったんだ・・・。」

「・・・だから、その時落ち込んでたのね。」

美琴が納得と哀れみを持った表情で言ってきた。

「元々、私の体を見ても劣情を催す人はいないのだが・・・。」

「「「木山先生は黙っていてください。」」」

筋違いな木山先生の呟きに４人の冷酷な言葉が。

酷ぇ。

オレと木山先生を除く４人がひそひそと話し始めた。

『ねえ、もしかしたら、零の精神も女になってきてるんじゃない？』

『そうかもしれませんわ。いくらなんでも何も思わないのはおかしいでしょうし。』

『じゃあ、零さんの精神も女になっていってると仮定して・・・』

『仮定して何ですか？佐天さん。』

『零さん、変えたくないですか？皆さん。』

『『『？』』』

『多分今は精神が女になりかけている途中なのでしょう。今の内に色々と吹き込んでおけばかなりのものになると思いませんか？』

『吹き込むって・・・』

『何いってんのよ。初春。今の零さんを見て変えてみたいと思わない？』

『まあ、確かに・・・』

『あのままじゃあ、宝の持ち腐れですわね。女らしさが全くありませんわ。』

『私は賛成よ。おもしろそうだし。』

『私ももちろん賛成ですわ。』

『私も、いいと思います。』

『満場一致ですね。皆さん、やってやりましょう！』

話は終わったみたいだ。

何か、４人が意気込んでいたが何だったんだろう？

ゾクッ

寒気が襲ってきたので考えることを放棄した。

誰だって怖いものがある。

そんな時、今まで空気だった木山先生が口を開いた。

「君は男になりたいみたいだが、君の能力で男になるものを作ったりはできないのかい・・？」

「「「「「！！！」」」」」

「そうか、そうだよな・・・。」

何で今まで思いつかなかったんだろう。自分の能力は生物以外のあらゆるものを生成し操る能力。ていうことは『性転換する薬』でも作ればよかったんだ。

「駄目ですわ！」

「そうです！」

オレが男に戻れる希望を知ったと同時に反論がきた。

何故!?オレはもう女なんかやめたいのに!

「零さん!男になったりでもしたら、意味がないです!」

飾利。君はもっと静かなキャラじゃなかったかい?

それに、

「意味がないってどういうこと?」

「それについては後で説明します!今はこっちが重要です!」

「まあ、良いけど。オレは男に戻りたいんだけどなあ。」

最近、女として慣れ始めたけどやっぱり戻れるんなら戻りたい。

「とにかく、アンタは!男になったら駄目!今のままでいなさい!」

バン!と手をテーブルにたたきつけた美琴が今にも電気を出しそうなほど殺気立っていたので、素直にうなずくしかなかった。

何か、オレへたれキャラになってる?

最初と趣旨が全く違ったが、幻想御手(レベルアッパー)ついて話は終わっていたので、数分後ファミレスの前で解散した。

意味については後日教えるといっていたので待つとしよう。

木山春生と発覚（後書き）

とうとうばれました。
いつばらすか悩んだのですがなるべく早い方がいいかと思いまして。

魔術師

寮に帰ったら寮が炎上してた。

多分、というか確実に当麻とステイルの戦いはもう始まっている。じゃなきゃ、炎上するなんてありえない。

「やばっ！遅かった！」

急いで向かう。

魔術サイドどうも遅れるな。インデックスといい、ステイルの戦いといい。

そこでは当麻がステイルから逃げていた。

当麻が息を切らせているのに対し、ステイルはタバコを吸いながら余裕と言った表情で追っている。

「零！ひとまず逃げるぞ！」

当麻がオレの方へ走ってきて、オレの手を握って連れ出した。

「ん？別にそこらへんの魔術師なんかには負けないけど？」

「「！？」」

オレが説明もされていないのに当てたのが不思議なのか2人とも驚く。

「何で魔術師のことを知っているんだ？」

「んー、オレは学園都市の暗部だから。まあ、その前から知ってたけど。」

当麻は驚いたようだが、すぐにステイルの方へ向く。
ステイルは未だに立っていて攻撃してこない。

「どういうことかわからないが、2人ともに逃げられるのは困るからね、そろそろ本気でいかせてもらう。」

ステイルは詠唱をし始めた。

「世界を構成する五大元素の一つ、偉大なる始まりの　炎よ。
それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁　きの光なり。
それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅　する凍える不幸なり。
その名は炎、役は剣。
顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！」

ステイルが叫ぶと、魔女狩りの王（イノケンティウス）が出現した。
ドロドロで溶岩みたいだ。

「殺せ。魔女狩りの王（イノケンティウス）」

オレは魔女狩りの王（イノケンティウス）を見て――

魔術できるか試してみるか。

――頭で魔女狩りの王（イノケンティウス）を想像する。

すぐに、ステイルと同じ魔女狩りの王（イノケンティウス）が生成された。

「「！？」」

驚いてる。驚いてる。おっもしれー。

「零も魔術師だったのか！？」

「当麻、オレの能力忘れたのか？」

当麻は思い出したのか、納得したような顔だ。
ステイルはわからず、怒っているようであります。

ちょっと頭が痛い。
この程度の魔術ならちょっとの頭痛で済むのか。

「当麻、ちょっと火災報知機ならしてスプリンクラーをやってくれ。」

「アイツと戦わなくてもいいのか？」

「お前の右手と魔女狩りの王（イノケンティウス）の相性は最悪だ。消してもすぐ再生する。でもアイツのそこらじゅうに張られているルーンはインクだ。水で落ちる。」

「！！そっか。わかった。」

当麻はそう言って消えた。

まだステイルは理解できないといった顔だ。

「な、何で魔術が使える！？しかも、ルーンのことまで！」

かなり動揺している。もっと動揺させるか。

「教えるわけねーだろ。親友の少女を追って、しかも怪我させた。ああ、これは神裂の方か。まあそれはどうでもいいや。とにかく、真相にも気付かないようなステイル君にはな。」

多分オレは黒い笑みをしているんだろう。

オレってこんなにSだったっけ？

「！！！」

おーおーあからさまに驚いてますって感じ。

まあ、そうなるだろうな。いきなり現れた奴が魔術を使えて、しかも自分たちのことを知っている。

「くそっ！行け！」

混乱したステイルの叫びと共に魔女狩りの王（イノケンティウス）が突っ込んできた。

オレも自分の魔女狩りの王（イノケンティウス）で向かい打つ。

力は拮抗。

オレはその間にステイルの所へ行く。

ちょうど良い！アニメとかも試そ！

掌に小さい螺旋丸を生成。

頭痛がかなり大きくなった。

『魔術』に『この世界に存在しないもの』の二つの同時生成に操作は結構きついな。

こりゃ、他の日にまた色々実験した方がいいかな？

とりあえず呆然と立っているステイルの腹に当てる。

ステイルは防御したが、その体ごと回転し壁に直撃した。

ステイルは気絶し、腹は抉れ大量に血が流れて、口からは血を吐いている。

魔女狩りの王（イノケンティウス）はいつの間にか消えていた。

オレの魔女狩りの王（イノケンティウス）も消しておく。

えーと、死んでないよね？

ステイルの怪我を治すついでに他のも試そう。

ハンターハンターの『大天使の息吹』のカードを生成。
流石に螺旋丸も魔女狩りの王（イノケンティウス）もないから大したことはなかった。

「ゲイン！」

天使が現れた。
と言っても、この世界の天使じゃないけど。
てか、こんなのも生成できるのか。

こういうのは生物には入らない、と。
また新しい発見だ。

『わらわに何を望む？』

「こいつの怪我を治してやって。」

『お安い御用。その者の怪我を治してしんぜよう。』

大天使の息吹がステイルに降りかかる。
すると、ステイルの怪我が直った。

その後、大天使が消えた。
ちょー便利。

そういえば、当麻全く活躍してない。

まあ、いっか。
当麻に電話し、倒したことを伝える。

インデックスの怪我も治さなくちゃ。
「零！アイツ倒したって！」
「ん、あそこに。」
オレが指差したところにはステイルを抱えている神裂がいた。
「！」
「お！神裂さんじゃないですか。」
「・・あなたは、何者ですか。」
神裂が警戒しながら聞いてくる。
「オレはただの男装少女だよ。」
「は！？」
あ、当麻に言ってなかった。
まあ、いいや。

「零やっぱり女だったのかよ！」

「ん、そう。で、神裂さんはどうするの？戦う？」

此処で戦ったら多分オレは負けるだろうな。
近距離戦闘でもされたら勝てそうにない。
と言っても、流石にステイルを放って置いたりでもしたらステイルが危ないだろう。

神裂やさしいからね。

「いえ、ここは退いておきましょう。」

「そう、懸命な判断だね。」

神裂がステイルを抱え、消えていった。

「そうだ！インデックス！」

インデックスは汗が大量に出て、顔が青ざめている。
そろそろやばそうだ。

「ゲイン。」

また『大天使の息吹』を生成。
インデックスの怪我を完治させた。
当麻が大天使をみてかなり驚いていた。

なんでもありだなと言われた。オレだってできないことはあるはず。

多分。
ていうか、漫画とかも使えたら一方通行倒せるんじゃね？
いや、でも無理か。
あれは本当に当麻みたいな特別なものじゃないと効かないだろうし。
インデックスについては、流石にいくら当麻といえ、男の部屋に預けるわけにもいかないのでオレが預かることにした。
もちろん、月詠先生の回復魔法はなかった。

幻想御手（前書き）

今回かなり短いです。

幻想御手

オレは今、黒子と一緒に廃墟に向かっている。
幻想御手の取引場所であり、あの偏光能力者がいる所。
黒子には止められたが、無理矢理ついてきた。
廃墟に着くと、涙子が偏光能力者に捕まっていた。
「風紀委員ですの。」
黒子がそう言いながら近づいていく。
「白井さん！零さん！」
不良どもがオレたちを見てゲラゲラ笑ってきた。
ちょっと切れながら言う。
「黒子、お前はあの2人を頼む。オレは涙子を捕まえてる奴やるから。」
「わかりましたわ。くれぐれも無茶はしないでくださいまし。」
「ああ。わかったよ。」
黒子が不良2人のところに行く。
「俺たちはレベル3だぜ？勝てると思ってるのか？」

偏光能力者がオレに対して行ってきた。

「ふうん。オレはレベル５だけど？あいつだってレベル４だ。」

「は！レベル５だろうが倒してやるよ！」

偏光能力者は涙子を放して、オレに向かってきた。
いくら幻想御手で強くなってるといっても浮かれすぎじゃね？

確か、偏光能力って自身の周囲の光を捻じ曲げ誤った位置に象を結ばせ周囲の目を誑かす能力、だっけ。
まあ、何気に強いかもしれないけど、レベル３なら対して脅威ではない。

原作では黒子が苦戦していて結構強いかもと思ったが、それは黒子が座標での攻撃しかできないことと、黒子自身の身体能力が弱かった。ってからなんだよね。
オレも今は女の体だから身体能力はしょぼいんだけど。

それに、偽者と本物はかなり近い距離にあるから攻撃範囲の広い攻撃をすれば偽者だろうが本物だろうが関係ない。
もしかしたら距離を離せることもできるかもしれないけど、目の前のコイツは油断している。

結局何が言いたいのかと言うと、

楽々勝てるんだよね。

オレは体の周り全体に電気を生成。

「！！」

偏光能力者が急いで回避しようとするが、遅い。

バチバチと音を立てた電気が偏光能力者に直撃した。

生成した電気は１００万ボルト。

並大抵の奴なら耐えられなくて気絶するだろう。

現に偏光能力者は気絶した。

黒子の方を見てみると、黒子も不良２人を倒したようでその不良どもが地面にはいつくばっていた。

やっぱり偏光能力者をオレが引き受けておいてよかった。

流石に大怪我をさせるのは嫌だしな。

「お疲れ。黒子。」

「ええ。」

黒子は気絶している不良どもを起こし、幻想御手を奪い取った。
いくらなんでも不良どもをテレポートし頭から落とすのはどうなのだろうか？

・・・気にしないでおこう。

起きた不良どもが「来る・・・来る！」とか「あ、あああああ・・・・・・！」とか奇声を発して倒れた。

そいつ等は目の焦点があっていなくて、もうかなりヤバイ感じだった。

その後は警備員に任せて終わった。

黒子は風紀委員の支部に向かったみたいだ。

オレは特にすることもなく、寮に帰った。

昼食を食べてなかったので外食にした。
ちなみにオレは大抵の料理を作れるけど、今日はインデックスの腹がヤバイことになっていたのですぐ食べることを優先したのだ。

インデックスがかなり食うことを実感した。

オレはレベル5判定なので金には困ってない。
ヤバイ時には能力で金を作れるから全く問題ない。

とは言っても、インデックスが食った時の値段は転生前では信じられないほどだった。

原作の当麻がかなり不憫に思えて仕方がなかった。

幻想御手（後書き）

次話はオリジナル、かも。

女化計画（前書き）

総合評価６００ｐｔ行きました。ありがとうございます。

女化計画

それは朝食を食べのんびりしていて昼に差し掛かった頃の出来事。
インデックスは当麻と一緒に出かけ、原作でも何もない今日。
久しぶりの休日で、もしかしたら気が抜けていたのかもしれない。

――その事をオレは後に後悔することになる――

「白井ですわ！」

突然ドアを開け入ってきた黒子。

いきなりのことで頭がついて行かなかった。

黒子はそのままオレの手をとりテレポートした。

原作では何もないはず。

なら、イレギュラーか！？

慌てたオレは黒子に説明を求めるが、黒子は無視してそのままテレポートし続ける。

黒子の顔に焦りなどはない。
ということは、別に幻想御手とかの話ではないだろう。
少し安心したオレは気が抜けてしまった。

――そのせいでオレは、黒子が僅かに黒い笑み（・・・・・）を浮かべているのに気がつかなかった。――

――そう。その時すでにオレは奴等の術中に嵌まっていた。――

――そのせいでオレは人生最大の屈辱を味わうこととなる。――

数分後。

セブンスミストの前に美琴、飾利、涙子がいた。

「で、何なんだ？」

そう聞くと黒子を含む４人が笑った。
オレにはその笑みが黒い笑みにしか見えなかった。

これは危険だ。

この笑みは・・・あ（・）の（・）時と同じ・・・・！！

すぐに状況を判断し全速力で逃げる。

いや、逃げようとした。

「何処へ行くの？レ　イ　さ　ん？」

４人から溢れ出る殺気でオレは逃げることができなかった。
いや、逃げることはおろか、そこから動くことすらできなかった。

この殺気は何なんですか？皆さん。

明らかに普通の女子中学生に出せるような代物でございませんよ？

オレ、結構暗部の敵とかと戦ったけど、今までこれほど恐ろしいと思えるような人はいませんでしたよ？

「い、いや、あああの・・・」

「行くわよ！」

美琴がオレの手を引っ張って行く。

行きたくない。

非常に行きたくない。

明らかにこのまま行くとヤバイ。
もう本能が逃げろと告げているし。

ていうか、これから何が始まるんですか？

数分後、オレは４人の着せ替え人形と化した。

どうやら４人は女の格好をしないオレをどうにかしようと思ったらしい。
そもそも、オレは女として暮らすつもりはないんですがね。
そう言ったら、かなり怒られた。
美人なんだからもったいない、とか。
と言っても、そういうのは建前らしく単純にオレを着せ替えして楽しみたいようだ。
実際に楽しんでたしね。
まず最初に、下着をどんどん買わされた。
買ったものは４次元ポケットに入れておいた。
オレは自分のサイズすら知らなかったのでまずそこから始まった。
知らないと言った時の４人の反応は凄まじかった。
図って貰ったところオレはスタイルが良いらしく、４人から恨めしいといった感じの視線を頂きました。
涙子がたまにきわどいのを薦めてきたり、美琴が自分の世界に入り込み子供っぽいのをぼーっと見ていた。
まあ、まだこの辺りまではマシだったんだ。
別にこれからブラジャーとか使うつもりもなかったし、試着とかもされなかったから。
でも、

その後は、正にオレにとっての地獄だった。

あれこれ試着を色々させられました。

オレが恥ずかしがって断っても断固無視。

もうかなり短いミニスカートとか、明らかにオレへの嫌がらせにしか感じないようなものばかり着させらた。

多分からかってやってるんじゃなく、真面目にやっていたんだろうけど、それが逆にオレにとって辛かった。

だって、好意でやってくれることを断るわけにはいかんでしょ。

しぶしぶながらオレは試着をしていった。

でも恥ずかしいものは恥ずかしい。

元男としてのプライドとかズタズタに切り裂かれた。

途中からはもう諦め、好きにさせた。最初からされてたけど。

最初着ていた服は取り上げられ、買った服で買い物を続けられた。

その服装は上はまだ普通のでいいのだが、下は太ももを露出するショートパンツ。

胸当てをつけない慣れてない服装で落ち着けなく、露出がかなり恥ずかしかった。

最後には化粧までさせられた。

化粧が終わったとき、４人がヒソヒソなんか話し始めた。

微妙に興奮してる？

オレはその間に鏡で自分の顔をじっくり見てみた。

切れ長の目に桜色の形のいい唇、さらさらとした黒髪に映える白い肌。

薄く化粧することでそれらが更に際立っている。

自画自賛になるけど、これ絶対自分じゃなかったら惚れる。
そこらへんのアイドルなんか目じゃないレベルだ。

飾利『これはやばいです！皆さん！』

美琴『見事に変わったわね・・・。』

黒子『服装でもかなりの変化でしたが・・・。ここまでとは。』

飾利『容姿については私たちが嫉妬を通り過ぎて憧れまで行くレベルですね。』

美琴『いやそうなんだけど、そこまではっきり言われると・・・。』

涙子『これで後は口調が戻ったんなら・・・。』

黒子『口調についてはこれから矯正していくとして、今日はこれだけにしておきましょう。』

自分の顔について考えていると４人の話が終わった。
何を話していたか聞いてみたが教えてくれなかったので気にしないでおいた。

そろそろ昼食の時間になったのでそのまま皆で食べに行った。

行く最中、ナンパされた。
だが、黒子と美琴の見事なコンビネーションで沈んでいた。

今思うとそれなりに楽しかったかも。
次も別に行ってもいいかなと思った。

女化計画（後書き）

アンケートをとりたいと思います。

主人公の相手は誰がいいですか？

?上条　当麻

?一方通行

?その他　原作キャラ

?オリキャラ

?は名前も書いてください。

?はそのオリキャラの特徴なども書いてくれるとありがたいです。

今のところ?が一番有力です。

?は前にも言ったとおり美琴と結ばれる予定ですが、アンケートの結果次第です。

多才能力（前書き）

アンケートの結果主人公の相手は一方通行に決まりました。

多才能力

今日は7月２４日。
木山春生の逮捕に神裂との戦闘などかなりのハードスケジュールだ。
流石に演算処理がもちそうにないので４次元ポケットに武器を大量に入れてある。
ハンドガン、ロケラン、手榴弾、ナイフなどの武器や、回復薬などのアイテムなど色々。
先に生成しておけばすぐ作る必要はないしね。
それと、４次元ポケットと言っても、某猫型ロボットのような奴ではなくバッグがそうなっている。

共感覚性については全くオレが干渉するようなことはなかった。
残念だが原作通り涙子が幻想御手を使って意識不明になった。
前に使わないよう言っておいたんだけどな・・・。
やっぱりレベル０のままなのは嫌だったんだろう。
もっと言っておけばよかった。
今更言っても仕方ないが、やっぱり後悔してしまう。

病院にいくと幻想御手を使って昏睡状態になった人が収容されていた。
涙子のほかにも、虚空爆破事件の犯人や偏光能力者、発火能力者も

いた。

今思うとかなりいるよな。

あのカエル顔の冥土返し（ヘヴンキャンセラー）にも会った。
美琴が本人の目の前で「ゲコ太っ！？」と言った。流石に失礼すぎるだろ。

話があるようで聞いてみるとやっぱり幻想御手を使った患者たちの脳波パターンについてだった。

その後、風紀委員の支部に戻り調べると脳波パターンが木山先生と同じで幻想御手の製作者だとわかった。
もちろんのこと、木山先生のところに向かった飾利と木山先生に連絡は通じなかった。
すぐさま警備員に連絡して向かった。

飾利は多分捕まっただろう。
原作で何もされなかったとしても、オレというイレギュラーがいるから原作がどう変わってもおかしくない。

４次元ポケットから『どこでもドア』を取り出し美琴と一緒に木山先生のところにいった。
黒子には風紀委員の支部に居てもらった。

木山先生のところに行くと警備員の人たちが倒れていた。

やっぱり多才能力(マルチスキル)を持っていて、警備員の人たちはそれぞれ違う能力で気絶されていた。

「こんちは、木山先生？」

「君達か。」

「初春さんは大丈夫なんでしょうね。」

美琴は今にも攻撃をしそうな感じで微妙に電気が出ている。

「ああ、彼女なら無事だ。怪我もしていないはずだ。」

それを聞いて安心した。

「それにしても、学園都市が誇るレベル5が2人もか。流石の君たちも私のようなものを相手にしたことはあるまい。さて、君たちにはこの一万の脳を統べる私に勝てるかな？」

木山先生はそう言って火炎2つ出し攻撃してきた。
オレは風を生成し空中に回避。美琴は横に回避した。

美琴は回避しながらも電撃で攻撃するが、木山先生の目の前で曲がり当たらなかった。
周囲に避雷針のような性質のものを作り出している。

さらに、オレに風の刃が向かってきた。
オレは回避しつつ、4次元ポケットから取り出した銃を撃つ。

「！」

木山先生は一瞬驚いたが空間転移で回避。

「驚いたわ。本当に能力を使えるようね。しかも、『多重能力（デュアルスキル）』！」

「私のは『多重能力（デュアルスキル）』とは少し違う。言うならば『多才能力（マルチスキル）』だ。」

木山先生は、衝撃波で地面と橋を破壊させる。

美琴は磁力操作を利用し柱に掴まって木山先生と距離をとる。

オレも美琴の近くに着地する。

「木山先生は何でこんなことをするんですか！色んな人を犠牲にして！！」

「やれやれ。レベル5とはいえ世間知らずのお嬢様だな。君はどうなのか知らんが。」

木山先生はオレのほうを見て言ってくる。

「オレは美琴ほど知らないわけじゃないぞ。」

当たり前だが原作の知識はほとんど覚えてるし、実際に暗部になってこの学園都市の闇を垣間見た。

その時は流石に現実と小説でかなり感じ方が違ったが、どちらにせよクズが居ることはわかっているし、それを止めることはできないこともわかっている。

「世間知らずって・・あんたにだけは言われたくなかったわ・・・。」

今の美琴はあの『量産能力者計画（レディオノイズ）』と『絶対能力（レベル６）進化』も知らないただの中学生だ。
残念ながら木山先生の言うとおりかな。

「なら聞くが、君たちが行っている能力開発。それが本当に安全で人道的なものだと思っているのか？あれを行う上の連中はきっと何かを、能力開発に関する重要な何かを隠している。それが信頼の置けるものだと思っているのか？」

「・・・興味深い話だけど、それは後でじっくり調べさせてもらうわ！」

美琴はそういって砂鉄を鋭くしたもので攻撃するが、木山先生が操った瓦礫に防がれる。

オレも４次元ポケットから手榴弾を取り出す。

「さっきから君はあまり能力を使わないのだな。」

「オレのは演算がかなり難しいからな。すぐスタミナが切れるんだ。」

これはホント。
でも、一回の戦闘できれるほど少ないわけじゃない。
ただ、これからＡ？Ｍバースト、神裂との戦いもあるから今使いすぎるとヤバイ。

手榴弾を投げ続ける。
爆音は響くが、木山先生に目立った外傷はない。
木山先生が空き缶を利用した爆弾を使ってきたので手榴弾をやめ銃に取り替える。
美琴も電撃で空き缶を破壊し続ける。
オレも銃で破壊する。
しかし、その一つがオレと美琴の後ろに転移。
気付いたオレはすぐさま風を生成し移動したが、美琴は気付いていない。
「美琴！」
美琴は爆発に巻き込まれ倒れている。
それを見た俺は攻撃をやめ地面に着地する。
木山先生はオレの行動の意味がわからなかったのかオレにいってくる。
「何故攻撃をやめた？」
「何いってんの？もう十分、オレはもう何もしなくていい。」
どういうことだ？、と言う木山先生の腹に美琴が抱きつく。
やっぱりな。原作通り美琴は爆発を防いでいた。

「ほらな。美琴が後をやる。」

「くそっ！！」

慌てた木山先生は美琴をふり払おうとするが、その前に美琴が電撃を浴びせる。

「ぐあああああ！！」

美琴の電撃で木山先生が倒れる。

ようやく第一戦目が終わった。

学園都市の闇（前書き）

原作のままです。

学園都市の闇

「手加減はしたけど、これで戦闘不能のはず・・・。」

電撃で倒れた木山先生を美琴が支える。

「っ！？」

その時、オレの脳裏に小学生くらいの子供たちの木山先生を呼ぶ姿が映る。

美琴の方を見ると美琴も見えたようで驚いて目を見開いている。

そして、木山先生の記憶が再生された。

嫌々ながらも置き去り（チャイルドエラー）の小学生教諭になったこと。

そして、その生活の中で置き去り（チャイルドエラー）の扱いを知ったこと。

毎日を過ごすたびにこの生活が楽しいと感じ始めたこと。

そんな中のＡＩＭ拡散力場制御実験の失敗。

実験を受けた自分の生徒の置き去り（チャイルドエラー）は昏睡状態になり、木山先生は絶望したこと。

そしてその実験はＡＩＭ拡散力場制御実験ではなく、置き去り（チャイルドエラー）を犠牲にした暴走能力の法則解析用誘爆実験であったこと。

記憶はそこで終わった。

これって、電撃使い（エレクトロマスター）の中でもトップである美琴だから、電気を介した回線で見えるんじゃなかったのか・・・？

まあ、どうでもいいか。

美琴は木山先生を地面に落としてしまう。

木山先生はその衝撃で目が覚めたようで、頭を抱えている。

美琴の顔は信じられないと言った表情だ。

「観られた・・・のか・・・！？」

「あんな事・・・。」

木山先生は攻撃しようとするが、頭の痛みでまともにできていない。

「人体実験・・・。それこそ警備員（アンチスキル）とか・・・。」

「23回。私があの子たちの恢復手段を得るため、そして事故の原因の究明のためのシュミレーションをするために『樹形図の設計者(ツリーダイアグラム)』の使用を申請し却下された回数だ。」

美琴の言葉を断ち切るように木山先生が言う。
その間にも木山先生は攻撃してくるがほとんど狙いがはずれて意味がない。

「統括理事会自体がグルだったんだ。警備員(アンチスキル)が動くはずがない。」

「けどアンタも同じことをしたら意味がないんじゃ・・・。」

美琴の言葉を遮り木山先生が美琴を睨んで叫ぶ。

「あの悲劇をもう2度と繰り返させはしない！そのために私はどんなことでもする！」

ふらふらしながらも立った木山先生はもうすでに頭痛で能力を使えないようだ。

「この学園都市の全てを敵に回してでも私は止まるわけにもいかないんだ！！」

いい覚悟だけど、諦めてもらうしかない。
それに、もうそろそろあの幻想猛獣（ＡＩＭバースト）出てくるだろうし。

「ぐっ！！？」

木山先生は突然頭を抱えて苦しみだす。

「ぐああああああ！！！！！」

「ちょっと・・・。」

「ネットワークの暴走・・！？いやこれはＡＩＭ《虚数学区》の・・・・。」

美琴が駆け寄ろうとした時、木山先生の背中から異形が現れる。
それは胎児のようで、それに天使のような翼と輪をもっている。

「は・・・？」

『■■■■■■■■■■■――――――――――！！！！！！！』

ノイズの入り混じった声が響く。

ついに第2戦、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）との戦いが始まる。

幻想猛獣（前書き）

遅れてすいません！

幻想猛獣

「胎児・・？」

「んー、見た目的にはそんな感じだけど・・」

幻想猛獣（ＡＩＭバースト）はギョロギョロとした赤い目に背中から翼のようなものを出して空中に浮かんでいる。
頭の上には天使のような輪っかがある。
胎児のような形をしているが、そもそも大きさが違うからそんな生易しいものじゃない。

『■■■■■■■ーーーーーーーーー！！！！』

「うざ。」

オレは４次元ポケットから出したマシンガンで幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を撃ちまくる。
しかし、それは全く効かず反撃に衝撃波を出してきた。

「やっぱり効かねえか！」

オレはイラつきながらも避ける。
確認のためにやってみたが、攻撃効かないとかチートすぎだろ。
それでなくとも多才能力（マルチスキル）だってのに。
マシンガンを４次元ポケットにしまう。

「ちぇえい！」

オレが何を出そうか考えている間に美琴が電撃で攻撃する。
それは幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の一部を爆ぜさせた。

しかし、その部分から何かが出てきてボコボコ音を立て更に大きくなった。

はっきり言って・・・

「気持ち悪・・・。」

『■■■■■■■■――――――――！！！！！！』

幻想猛獣（ＡＩＭバースト）が叫んで水弾を出し攻撃してくる。
別にたいした攻撃ではないんだけど、やっぱり再生が厄介だ。

初春早くワクチン流してくれないかな・・・。

そう思ってると、遠くから銃の嵐が幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に降り注ぐ。

あぁ、警備員（アンチスキル）か・・・。

でも、全く効いてないよー。

その銃の攻撃も効かないとわかったみたいで止み、次はロケットランチャー？か何かわかんないけど、とりあえず結構な威力の奴で攻撃した。

爆発で幻想猛獣（ＡＩＭバースト）が見えなくなる。

何か「やったか！？」とか聞こえる。・・・死亡フラグだよそれ。

警備員（アンチスキル）の人はちゃんと回収したようであっさりやられた。

一人の警備員（アンチスキル）が何時まで経っても逃げず攻撃し続けてる。

オレと美琴はその人のところに行く。

美琴が幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の攻撃からその人を助ける。

「何ぼやっとしてんのよ。」

「そんな風にしてると死ぬぞ？」

美琴とオレがその人に言ったら、驚いたような顔をした。

「民間人がこんなところで何してるの！？早く退避しなさい！」

「いやいや、アンタもさっき涙目だったし。そもそもそんなこと言ってる場合じゃないだろ？」

「う・・・。」

弱いところを突かれ、黙ってしまう。

「それにオレ達レベル5だけど？それでもまだ言う？」

「・・・わかったわ。」

少なくとも一人で倒せる相手ではないことを理解しているのか、警備員（アンチスキル）の人は諦めた。

「それにしても、そろそろ倒さないとな。」

「？」

オレの言葉を警備員（アンチスキル）の人はわかったのか顔を青ざめ、美琴はわからず首を傾げた。

「美琴。アレ何かわかる？」

「何？」

オレの指す先を見てもわからないみたいなので教えてあげた。

「原子力実験炉。」

「マジ？」

とりあえず、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）を原子力発電所に近づけないためにまた戦うことになった。
警備員（アンチスキル）の人は居ても変わらないというか、逆に邪魔なので他の倒れている警備員（アンチスキル）を攻撃の届かないところに避難させるよう言っておいた。

で、今絶賛戦闘中なんだけどオレは美琴みたいにバンバン能力を使うわけにもいかないのでちょっと離れたところで銃で攻撃中。

アニメや漫画の道具などはかなり演算を食うので今は『４次元ポケット』と『どこでもドア』を入れて１０個くらいしかない。
別にそれらを使ってもいいんだが、使うほどの相手じゃないので使わないことにした。

普通に美琴で十分だしね。

美琴が足元に近づいている触手？に気付かないので銃で撃って助けておいた。

「気付かなかったわ。フォローありがと。・・・？」

オレに攻撃された部分は今までとは違い、すぐさま再生されずボコボコと音を立てるだけ。

初春が幻想御手のアンインストールを完了したみたいだ。

「なんだか知らないけどチャンスみたいね・・・。」
美琴はさっきまでよりかなり強い電撃で攻撃。
幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は真っ黒こげになった。
「ふー。なんとか倒したみたいね。」
美琴はそれで倒したと思って油断している。
「美琴！油断するな！まだ終わってない！」
「！」
美琴に向かっていた攻撃をオレは撃ち落とす。
「何でまだ動けんのよ！」
「どうせ核か何かがあってそれを破壊しなきゃ駄目なんだろうよ！」
幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は何か言ってるが意味は全くわからない。
それを聞いた美琴は立ち止まり電撃で攻撃するが木山先生と同じ誘電力場を作っている。
「全く、生みの親と同じで厄介なことをしてくれるわね・・。でも、これならどうよ。」
そう言って美琴は更に強い電撃で攻撃する。

誘電力場によってずらされているが、その電気抵抗の熱によって幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の体表がどんどん崩れていく。
流石、レベル５なだけあるね。
これくらいなら普通に当麻なんて楽勝だと思うんだけどなぁ・・・。

幻想猛獣（ＡＩＭバースト）も対抗して氷の塊を４つ作り美琴に攻撃しようとする。
しかし、オレが見逃すはずもなく全て撃ち落としてやった。

核が見えたところで美琴はコインを取り出す。

「こんなところで苦しんでいないでとっとと帰んなさい。」

微笑みながらコインを指で打ち上げ、音速の３倍の速度で撃ち出す。
超電磁砲はそのままっすぐ幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の核を破壊する。

『■■■■■■■■■――――――――！！！！！！！』

幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は叫び声をあげ崩れた。

こうして第２戦は終わった。

それにしても、オレほとんど何もしていないな・・・。

幻想猛獣（後書き）

次話は神裂との戦闘なんですが、何か出したい道具、技などあれば教えてください。
ぶっちゃけ、自分じゃいいのが思いつきません。
よろしくお願いします。

神裂火織（前書き）

かなり短いです。

神裂火織

木山先生、そして幻想猛獣（ＡＩＭバースト）との戦闘が終わり、今は木山先生の身柄の引渡しのため警備員を待っている。
すでに周りは暗くなり始めていてそろそろ帰らないと神裂との戦闘が始まってしまう。

今、すぐ近くで黒子が美琴の充電が切れているところを狙って色々としている。
原作で直接的には表現されていなかったが、あの黒子がやるだけあって結構過激だ。

一回止めようとしたが、黒子が鼻息を荒らし興奮しながらかなり殺気立った目でこう言ってきた。

――ジ　ャ　マ　ヲ　ス　ル　ナ――

美琴、ごめん・・・。
オレにはあれに挑む勇気ないわ・・・。

十数分後。

真っ白に燃え尽きた美琴と満面の笑みを浮かべた黒子がいた。
警備員の人も到着し、身柄の引渡し中だ。
「共感覚性。それを利用したネットワークの構成・・・。」
「？」
木山先生の突然の言葉に復活した美琴と黒子が首をかしげている。
「それは全て君から得た情報だ。」
木山先生が美琴の方を見ながら言う。
確かに、木山先生の作った『幻想御手（レベルアッパー）』はミサカネットワークの理論を利用してるみたいだったし。
「え？」
「つまり、君も私と同じ、限りなく絶望に近い運命を背負っているという事だ。」
何のことかわからない美琴は木山先生に詳しく聞こうとする。
しかし、もうすでに護送車に入れられていてできない。
「何のことかわかなければ、そこの彼女に聞いてみるといい。」
扉が閉まる直前に木山先生はオレの方を見ながら言った。
え？オレ？

「零？アンタ、何知ってんの？」
疑うような目で美琴が言ってくる。
今までのようにふざけているのではなく、本当に知りたいみたいだ。
別に教えても良いんだけど・・・。

携帯で時間を確認する。
もうすでに８時を過ぎている。

「美琴。それについては後にするか。自分で調べてくれ。」
オレはそう言い残し、『どこでもドア』で当麻のところに向かった。

オレが来るとそこには神裂と対峙している当麻がいた。
２人はもうすでに戦闘体勢に入っている。

「零・・・？」

「貴方は・・・・。」

オレが近づくと2人ともオレに気付いた。

「当麻。お前はインデックスの方に行け。」

「は！？いくらお前がレベル5とはいえ・・・・。」

オレの言葉に当麻が何か言ってくるがどうでもいい。

「当麻。あの露出狂剣士は魔術をほとんど使わない。大体がその身体能力を生かした剣術と体術。はっきりいって当麻は全く使えない。」

まあ、使うっちゃ使うんだけど。

しかもかなり強力な奴。

「な！？これはちゃんとした理由があるんです！撤回してください！」

オレの言葉に露出狂（神裂）が怒り、当麻が黙る。

「それに、あのロリコン変態神父がインデックスに何かするかもしれねーだろ？女を守るのは男の役目だろ。」

「・・・・わかった。お前も女なんだけどな。」

当麻の言葉にオレは苦笑する。

確かに、オレはもうすでに女だ。
風呂に入っても裸を見ても違和感を感じなくなったし。
もしかしたら、だれか男を好きになるのかもな。

そんなことを考えている間に当麻は走っていってしまい、神裂も戦闘体勢に入っている。

「さて、神裂さん。アンタはこのまま何もせず、またインデックスを苦しめるのか？」

「っ！！あなたに何がわかる！！」

オレの言葉にすさまじい殺気を浴びせてくる。
いやー、これはかなりきついね。

いくら暗部で戦ったっていっても元はただの一般人だったオレ。
プレッシャーがすさまじくて冷や汗だらだら。
足がすくみそうだ。

と言っても、負けるつもりはない。

「オレに勝ったらアンタの知らない真実を教えてやるよ。」

オレは『４次元ポケット』からＦａｔｅの『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』を取り出す。

これから第3戦、『聖人』神裂火織との戦いが始まる。

約束された勝利の剣（前書き）

一ヶ月以上も放置してすいませんでした。

更新を再開します。

約束された勝利の剣

『約束された勝利の剣(エクスカリバー)』を手に持ち神裂と対峙する。

神裂は聖人の力や七閃、唯閃を使った白兵戦を得意としているが、あのアックアとも張り合えるだけの魔術も使える化け物(チート)。遠くで攻撃しても多分相殺とかされてしまうだろう。

少し能力が使える程度一般人が勝つためには、相殺しきれないほどの攻撃(チート)をするしかない。

だからこその『約束された勝利の剣(エクスカリバー)』だ。

この前この『約束された勝利の剣(エクスカリバー)』を撃てるか確かめた時、一発撃って即刻気絶してしまった。

いくらこれがチート武器だとしても、その分魔力をかなり消費してしまう。

とは言っても、オレは一発撃てるだけでもかなりマシな方なのだろうが。

でも、そんなようじゃ戦闘では全く使えない。

どうしようか？と考えた時、オレの能力で魔力を生成してみたらどうなのか？と思い使ってみると大して労力を掛けずに成功した。

だから、存分に使うことができる。

今、神裂は警戒を解いていないが、攻撃を仕掛けてこない。

ステイルを倒すほどの実力を持つくらいしか情報はないだろうし、

慎重になっているんだろう。

だから今がチャンス。

神裂に攻撃され、圧倒される前に一発で終わらせる。

体内で魔力を生成する。

「約束された（エクス）――――」

剣を振り上げ、

「勝利の剣（カリバー）――――！！！！」

放った。

「――ッ！！？」

予想よりも上だったんだろう。
攻撃に驚いた神裂は回避に遅れ、光に変換された魔力は神裂を完全に巻き込んだ。

「やりすぎた。もしかしたら死んでるかも。」

ちょっと魔力生成しすぎちゃった。

・・・・ま、いっか。何とかなるでしょ。

煙が晴れて姿が見えたとき、神裂は右腕の肘から先が消滅し、全身はズタズタになり満身創痍だった。
出血も酷く、このままだと死ぬことは明白だった。
だが、宝具の中でもトップクラスの攻撃が直撃してもその程度ですんだのは聖人だったことと、反射的にガードしたおかげだろう。

「（油断しすぎましたね。ステイルを倒すほどとはわかっていまし

たが、ここまでとは・・・）」

神裂の思考がここまで冷静だったのは、体がもうほとんど動かすこともできないためだろう。

「（彼女が使ったのは本物の聖剣であるとは思えませんが、恐ろしい威力ですね・・・。）」

エクスカリバーは英雄アーサー王の所持していた史上最高といえる聖剣。
本物であるのならば、いくら聖人である自分でも喰らってしまえば跡形もなく（・・・・・）消し飛ぶ。
少なくともそれだけの威力はあるだろう。

だが、今の剣は右腕の肘から先を持っていかれ、全身に傷程度で済んでいる。
だから目の前にいる少女の持っている聖剣はレプリカなのだろう。

そう神裂は考えたが、

「（どちらにせよ、私の負けですか。）」

聖剣をしまい自分に近づいてくる零をみて諦めて目を閉じた時、

口に何かを押し込まれた。

「んぐっ！？」

「食え。このまま死にたくねえだろ。」

食べてみると、神裂の怪我が全て完治した。
右腕もいつの間にか再生していて神裂は驚愕した。

「なっ！！」

「あー、これは『仙豆』ってやつでな。一粒食ったら怪我完治＋１０日何も食わなくても大丈夫なんだ。」

すげえだろ？と自慢げに続ける零に対して、神裂は睨み疑った。
敵を一発で倒し、すぐさま完治させる。疑うなと言う方が無理だ。

「そんな睨むなって。アンタもあのままだったら死んでただろ？」
肩をすくませて余裕を見せてはいるが、実は内心冷や汗だらだらの零。
やっぱり殺気にはなれないらしい。
「確かにそうですが、助けて欲しいと頼んだ覚えはありません。」
警戒しながらもきっぱりとした口調で返す神裂に零は笑顔にして言った。
「まあ、そうだけど、『真実』を知ったらそんなこと言えないぜ？」
「問１！」
ビシッと指を立てて言う。
いきなりのこと、目の前に居る神裂は不思議そうにしている。

あれ？シリアスな空気はどこに？

・・・まー、気にしないでおこう。

「あなたは、ひとつだけでも世界を捻じ曲げてしまうものに対し、何も処置を施さないと思いますか？」

「？・・・・いいえ。」

疑問に思いながらも、とりあえず答える神裂。
まだこれだけじゃ分からないか。

「問２。離反の可能性のある者に全て情報が渡されると思いますか？」

「・・・いいえ。」

神裂が少し困惑し始めた。
次でわかるかな？

「問３。もし、本当に完全記憶能力者がたった（・・・）一年間で記憶の１５％が埋まるのならば、１００パーセント埋まるのは何年？」

「・・・っ！・・・５、６年」

ようやく矛盾に気付いたようだ。
今まで気付かなかった自分を責めているんだろう歯を食いしばっている。

「問４。人間の脳は、思い出を司るエピソード記憶や、運動の慣れを司る手続記憶、言葉や知識を司る意味記憶などそれぞれ分かれています。そこから導き出される答えとは？」

「インデックスの記憶は消す必要はない・・・・！」

ようやく、インデックスが持っている（というか覚えてる？）魔導書と、記憶消去は関係ないと気付いた。

神裂の顔は喜びの涙で濡れている。

泣くほど嬉しかったのか。
何で今まで気付かなかったんだろうね？
いくら上司でもあの最大主教（アークビショップ）が言ったことなのに。
まあ、大方魔術関連ばっかり調べて人の脳のつくりとかは調べなかったんだろう。

それにしても、ムカつくな最大主教（アークビショップ）。

強すぎる力を抑えるためとはいえ、１４、５歳の少女に対してここまでやるのかフツー。

組織のトップとしてはいいかも知れないけど、人間としたらかなりの外道だな。
容姿と口調だけならただのバカ美女なのに。

「まとめると、インデックスの覚えてる１０万３０００冊が利用されるのを恐れたアンタ達のトップ、最大主教（アークビショップ）がインデックスに魔術を使えないようにする魔術を掛けたせいで一年間に一回記憶消去するしかないってことだな。ちなみに、アンタ達に知らせなかったのはアンタ達を手放したくなかったから。」

「・・・・」

「ちょ。ムカつくのはわかるけど、心臓に悪いから殺気立つのやめて？結構きついんだよ？言っとくけどオレ１０日くらい前まではただの一般人だったんだから。」

オレがサラッと言うと神裂は驚いて目を見開き。

「！・・私は素人に負けたということですか・・・・。」

「あんまり落ちこむなって！あれは武器がかなりの反則なだけ！アンタは十分に強いって！」

落ち込んだ神裂を慰める。
まあ、落ち込むのは仕方がないかもしれないけどさ。
何せ一発で終わらせちゃったし。

「と、とりあえず！インデックスの記憶を消したくなかったら、３

日後に寮のオレの部屋に来いよ！」

罪悪感にいっぱいになったオレは逃げることにした。

『４次元ポケット』から『どこでもドア』を取り出し当麻のところへ移動。

移動すると、戦闘は終わったらしく、ステイルがのびていて当麻がボロボロになっていた。

インデックスは無傷だった。

とりあえず当麻に仙豆を食べさせ、寮に帰った。

ちなみに『どこでもドア』に当麻が驚いてたりしてたが、それは蛇足。

忙しすぎる一日はようやく終わった。

竜王の殺息（前書き）

関係ないですが、前話を前々話に入れました。

竜王の殺息

今日、7月27日はインデックスの首輪の破壊と当麻の記憶喪失という物語上で最も重要と言っていいほどの出来事がある。

インデックスの首輪の破壊は決定しているが、当麻の記憶については消すかどうか悩んでいる。
消さなければ原作を大きく狂わすことになるので消した方がいいのだが、記憶を消すことは当麻を殺すこととなんら変わりない。

非常に迷う。

今現在すでに夜の11時すぎ。

オレの部屋には意識を失い汗びっしょりになって横たわっているインデックスとインデックスを介抱している当麻がいる。
まだステイルと神裂は来ていない。

時間(リミット)は刻一刻と近づいている。

「どうしたんだ？そんなに眉間にしわを寄せて。」

オレが悩んでいると、その原因の当麻が言ってきた。

まさか、「お前の記憶を消すかどうか迷ってたんだ。」なんて言える筈もなく、

「何でもねえよ。」

「そうか。」

当麻は一言だけそういうと、またインデックスを介抱し始めた。

すでに当麻にはインデックスの完全記憶能力と１０万３０００冊の魔導書、首輪について話している。
聞いたときの当麻の反応は中々凄まじいものだった。

最初は誤解してステイルと神裂に対して「次会ったらブチ殺す！」くらいまでいってたが、ちゃんと誤解を解いておいた。

それでも、怒りの矛先がステイル達から処置を施した『必要悪の教会』に変わっただけだった。
現に、今も苦しんでいるインデックスを見て歯を食いしばっている。

・・・決めた。

当麻には悪いが、記憶については消すことにしよう。

オレの知っている原作では当麻が記憶を失ってあまり大変なことにはなっていない。

それに、最大の異常（イレギュラー）であるオレが言うのも何だが、消さなかったらどんなことが起こるかわからない。

オレが決めた中、部屋のドアが開かれた。
入ってくるのはステイルと神裂。
自分の手でインデックスを救えることが嬉しいようで、２人ともその表情はすっきりとしたものだ。

２人もかなりの戦闘になることと、当麻の右手がインデックスを救う鍵になることは伝えてある。
なので、神裂はすでに準備が整っているらしく、七天七刀を手にし

ている。
対してステイルの得意としているルーン魔術は設置型であるのでこれから準備するようだ。

数分後、ルーンも設置し終わった。
部屋にはいくつものルーンがびっちりと張られ、それはステイルの戦闘への覚悟を思わせる。

「行くぞ。」

当麻が右手をインデックスの口に突っ込んだ。

ビキッという音がして、当麻が壁まで吹っ飛ばされた。

『告』

『――警告！』

『Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｕｒａｒｙ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ――
――禁書目録（インデックス）の「首輪」第一から第三まで全結界の貫通を確認』

倒れていたインデックスがむくりと起きる。
さっきまで大量にあった汗が全て消え去り、輝きを失った目には魔法陣が映っている。

『１０万３０００冊の「書庫」保護のため、対侵入者用の特定魔術（ローカルウエポン）「聖（セント）ジョージの聖域」を発動します』

そして、インデックスの目の前に二つの魔法陣が展開され、“竜王（ドラゴン）の殺息（ブレス）”が放たれた。

記憶（前書き）

なんか、暴走した。

記憶

結果的に言うと、原作通りインデックスに掛けられていた魔術は無事に破壊。そして当麻は記憶喪失になった。

詳しく説明すると、インデックスの放った『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』を神裂の『唯閃』と『七閃』、オレの『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』で迎撃、その間にステイルが『魔女狩りの王（イノケンティウス）』で当麻を守る。

それが上手くいき、当麻がインデックスに掛けられた魔術を破壊した。

そして、当麻がインデックスを『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』の余波の羽から庇い頭に直撃。

ほぼ原作通りの展開と言える。

見てるだけで何もしなかったのは辛かったが、これからのことを考えて仕方ないと思うことにした。

その後は、重傷だった当麻を『どこでもドア』ですぐさまあの『冥土帰し（キャンセラー）』がいるあの第七学区総合病院に運び、治療してもらった。

流石異名をとるだけあって数時間で直してしまった。

それでも、記憶については直せなかったが。

でも、この人の医療技術はもう、技術を通り越して能力なんじゃないだろうか。
『治癒能力（リカバリーヤスター）』のレベル５『冥土帰し（ヘブンキャンセラー）』みたいな。

・・・・どうでもいいか。

とりあえず、当麻は今病室でぐっすりと眠っている。
インデックスも怪我もなく、当麻の寝ているベッドのシーツを握り締めながら寝ている。
その表情は安心そのもので、つい何時間前までの光景が嘘と思える程。

病室の外にはオレと神裂、ステイルが居る。

治療が終わった後、当麻が記憶喪失だとわかってから、神裂とステイルが黙り込んでしまった。
神裂は助けられなかった自分を責めているのか、手を握り締め、歯を食いしばっている。
ステイルは吸っていたタバコをへし折り、床に捨てて足で踏み潰した。

なんていうか、その・・・・

・・・・もっっっのすごい罪悪感！！！！！！

腹が！腹がぁ！！

罪悪感で胃に穴がああああ！！！！

いやだってさぁ！！もうね、なんか2人とも自分のこと責めてるしっ！！空気がピリピリしてるんすよ！！神裂さん！そんな血が滲む位手を握り締めないで！！ステイルも！タバコもうグシャグシャになって原型留めてないって！！2人とも悪くないのにッ！！分かっ

ててやんなかったオレが悪いのに！！インデックスも、そんな幸せそうな顔で寝ないで！！お願いだから！！オレの心が痛む！！リアルゲコ太さんもそんな悟ったような顔しないでぇえええ！！

「ぐす。」

「っ！どうしたんです！？突然泣いて！」

神裂さん。その優しさが逆に心に突き刺さるよ・・・・。

「その、すいません。」

「今回の件についてあなたが気にする必要はありません。全ては私の油断が招いた結果です。この私が油断をするなど・・・」

もうやめて！！オレの精神力（ライフ）はもう０よ！！！

閑話休題

数十分後、当麻が目覚めた。

インデックスは当麻の記憶がないことを聞いているので、最初は寂しそうにしたが自分のことを紹介した。自分の名前、何時出会ったか。

当麻はそれを見て、優しい嘘をつく。

記憶喪失も魔術が要因だから右手で触れたら元通りだ、と。

どれだけお人好しなんだ、当麻は。

インデックスはそれを信じて安心して病室から出て行った。

オレも病室の中に入る。

ちなみに神裂たちはもう当麻が目覚めた辺りで帰り、手紙を預かった。

とりあえず、神裂から預かった手紙を渡し、オレのことを紹介。

他にも、当麻が記憶喪失になった原因も一通り話しておいた。

そしたら、当麻なんて言ったと思う？

「前の俺が知らない子を助けるような奴で良かった」

だってよ。

しかも、オレにまで感謝してきた。

「手伝ってくれてありがとな。」

って。

オレはお前を殺したんだよ、当麻。

感謝される価値もないよ、オレには。

記憶（後書き）

主人公、罪悪感でいっぱい話。
あまりうまく書けなかったので今度直すと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0564n/

とある性転の想像生成

2010年12月12日09時59分発行